子育てひろば0〜3育ちの詩（うた）

聞かせて！
ひろば・支援センターで出会った
ちょっといい話。

子育てひろば0-2歳 育ちの詩（うた）

聞かせて！
子育てひろば・支援センターで出会った
ちょっといい話。

聞かせて！
子育てひろば・支援センターで出会った
ちょっといい話。

子どもたちは、家庭を基地としながらも、
成長に応じた子どもたち同士の関わりや、
世代を超えた様々な人たちとの
交流を通して育ちます。

子育てひろば・支援センターは、
そんな子どもたちや子育て家庭を応援し、
地域とつなぐ「かけはし」。

たくさんの、心に刻まれた出来事、風景があつまりました。

子どもたちの人生のはじめのいっぽを応援したい！
心の扉をひらく、大人のいっぽも応援したい！

そして、子育て家庭のいっぽは、
まちにとっても大きな宝物となりそうです。

とびらをあけよう

作詞・新沢としひこ

自分一人が　苦しいんだと
私は　思いこんでいた
袋小路に　さまよいこんで
明日が　見えなくなっていた

目の前にある　とびらをあけよう
新しい場所が　そこにある
勇気をもって　とびらをあけよう
新しい世界が　待っている

明るい声が　迎えてくれる
それがなぜ　こんなに嬉しい
あなたのままで　いいんだよって
その一言に　涙こぼれる

目の前にある　とびらをあけよう
新しい出会いが　そこにある
勇気をもって　とびらをあけよう
新しい明日が　待っている

目次

はじめに …… 3
歌「とびらをあけよう」　作詞　新沢としひこ …… 4
嬉しい息子の成長　●庄田尋子 …… 8
新聞紙のシャワーでキャー　●伊藤抄絵子 …… 9
『おはなしなあに』がつなぐ育ちのバトン　●宮本みゆき …… 10
今日の涙は明日の元気！　●粟津裕子 …… 11
親子のオアシス　●石原美希 …… 12
子供達が導いてくれた空間　●柴山亜記 …… 13
楽しい毎日への一歩　●岩永千秋 …… 14
父親に子育ての楽しみを教えてくれた支援センター　●芝元憲太郎 …… 15
ひろばの新入りさん　●浅間理絵 …… 16
のびのび育児　●エミリオ 40（ペンネーム） …… 17
インドネシア人のママ友達との出会い　●豊巻智子 …… 18
なんくる家は私の故郷　●黒石恵子 …… 19
泣いてしまった日　●そよかぜ（ペンネーム） …… 20
僕のことを見て　●山下知子 …… 21
私の大切な「離れ」　●富田恵 …… 22
こどもの背中　●大村華奈 …… 23
出会いの場　わらべに乾杯！　●鍵山その子 …… 24
ソリソリはしれ　笑顔を乗せて　●金川直美 …… 25
つながり　●川島友紀子 …… 26
ずっとひろばがあるといいな　●成迫珠李 …… 27
初めての支援センター　●平尾晋太郎 …… 28
「子どもの夢が育つ場所」は「親の夢も育つ場所」　●深沢美紀子 …… 29
さいのこなつまつり　●原澤優里 …… 30

時間が流れてもかわらない場所　●せよこ（ペンネーム） …… 31
作るぞ！居場所、そして・・・　●藤岡邦子 …… 32
支援センターがくれたつながり　●村山順子 …… 33
ありがとう。と言える日　●岡本亜希 …… 34
心に残ったひとこと　●伊藤美智子 …… 35
未熟ママ　●早乙女みゆき …… 36
ママの笑顔が戻った日　●永井由香 …… 37
心に響いた言葉　●you（ペンネーム） …… 38
はじめまして！　●橘優生 …… 39
雨ふりの出来事　●井口絵美 …… 40
雨あがり　●安井安希子 …… 41
解き放たれた瞬間　●石原聖子 …… 42
りくくんはじめの一歩　●奥山ルリ子 …… 43
笑顔のちから　●古屋みずほ …… 44
支援センターの思い出　●森由紀子 …… 45
我が家の宇宙人　●上野憲子 …… 46
あったかい涙　●多賀糸智香子 …… 47
ねえママ達、一人じゃないよ　●河合十明子 …… 48
優しい心　●横山朋子 …… 49
カランコロン！　ーつながりー　●まっきぃ（ペンネーム） …… 50
応募者の内訳 …… 52
審査委員プロフィール・総評 …… 53
座談会 …… 56
歌「とびらをあけよう」　楽譜　作曲　新沢としひこ …… 62
編集後記 …… 63

作品の掲載順につきましては、作品のテーマやエリアなどを配慮し、事務局で順番を決めさせていただきました。順不同となっておりますことを、ご了承ください。

嬉しい息子の成長

庄田尋子（石川県）
親子つどいの広場まんま

「はると君がいるから大丈夫だね。」

「まんま」で遊ぶ子どもたちの中に息子がいる。うまく遊んでくれるし、はると君がいれば安心、というママ友のことばである。2年前には考えられないことば。嬉しくて心がくすぐったい。

2年前、2歳だった息子はトラブルメーカー。おもちゃを取ったり、お友だちを訳もなく押し倒したり、息子が行く先々で泣き声が上がる。「ごめんね、ごめんね」と謝り歩く毎日。新米ママの私は息子の行動が理解できず、「私の育て方のせいなのか」とひどく落ち込んだ。「またあの子がきた」と嫌がられるのではないかと思い、「まんま」に向う足も重くなった。そんな私にママ友は、「誰もそんな風に思っとらんわいね。今日もやんちゃ坊主連れてきたしよろしく～、ぐらいの気持ちできまっしね！」と笑い飛ばしてくれた。「まんま」の先生方もそんな息子や私にあたたかい目で寄り添い、受け入れて下さった。

それから2年、4歳になった息子は「まんま」の中ではすっかり面倒見の良いあんちゃんだ。下の子たちには優しく、同い年の子とは言葉で思いを伝え合いながら楽しそうに遊ぶようになった。その成長した姿がとても嬉しい。

知り合いもおらず、地理もよく分からない土地での子育てスタートはとても辛かった。家の中で赤ちゃんを抱え、ひどく追い詰められていたと思う。生後4ヶ月の息子を抱え、おそるおそる「まんま」に行った日から4年。「まんま」のおかげで私にも息子にもたくさんの友達ができ、子育てもずいぶんと楽になった。子育て真っ最中のママ友と話すと、家の中にいたら不安やイライラでくすぶりがちな気持ちが吹き飛び、心が軽くなる。

生意気盛りだが、数年後振り返ったらきっとかわいい盛りなのだろう息子の姿をつまらない心配やイライラで見逃さないために、明日もまた「まんま」に行って息子共々笑顔になって、優しいママでいられますように。

新聞紙のシャワーでキャー

家ではなかなかできない遊びにみんなすごい笑顔です。

伊藤抄絵子（岐阜県）
大垣市立牧田保育園地域子育て支援センター

『おはなしなあに』がつなぐ育ちのバトン

宮本みゆき（石川県）
親子よろこびの広場あさがお

十一時半、普段より早めに遊具の後片付けが始まります。そして、みんな中央のスペースに集まります。そう、今から広場恒例の、『おはなしなあに』の時間なのです。

だっこされたお膝で手遊びしたり、絵本を見つめ指を差したり、どの親子も思い思いにおはなしを楽しんでいます。プログラムを毎回企画・準備・進行するのは、広場にお子さんを連れて遊びに来られるお母さん達。約七名のお母さんがチームを組み、各々の都合に合わせ無理なく取り組んでいます。みんなの前に出ておはなしするお母さんの生き生きと楽しげな姿、子ども達も顔見知りとあって自然に絵本の世界へと引き込まれていくようです。そんな表情を見るたび、あぁ広場ならでは！　ステキだなと思うのです。

つい先日まで、私自身が我が子を膝に抱き、この場所で絵本を読んでいたものでした。私にとっては、我が子が最も心強いおはなしの助手でもありました。

一緒に歌い、手を叩き、紙芝居をめくり・・・『おはなしなあに』は、かけがえのない我が子とのふれ合いのひと時でもあったのです。『おはなしなあに』に参加することで、我が子との絆がより深まり、また広場の中での役割を果たすこともできる。そう気づいた時、まるで新しい人生の一歩を踏み出したような輝かしい思いがしたのです。

小さな一歩かもしれません。でも子育て支援が盛んに叫ばれる中で、支援される一方だった私は、何か虚しく孤独な母でした。それが、おはなしを通じて誰かを支援できる私を知ったのです。その喜びと自信が明日への扉を開き、母としての成長にもつながったと思います。支援したりされたりを行き来する中で、子どもだけでなく母も大きく豊かになっていく・・・広場だからこそ実現できる育ちの姿だと思うのです。

プログラムのラストは、季節の歌。美しいピアノの伴奏もお母さんです。この育ちのバトンが続くよう、私はここで見守っています。

今日の涙は明日の元気！

粟津裕子（大阪府）
大東市立キッズプラザ

私の勤める子育て支援センターでは、元気に子育てを楽しむお母さんがいっぱいです。でも時々、自分の子育てに自信を持てずに悩むお母さんも見かけます。

ひろちゃん（仮名）のお母さんは最近出産したばかりで、ひろちゃんの赤ちゃん返りに、困っている様子。「今は忙しくて大変な時やね。」日頃の頑張りを労うと、お母さんはポロポロと泣いてしまいました。ひろちゃんは、なんでお母さんを泣かすの？　と心配顔でにらんでいます。それから何回かの会話で、子育て支援センターではママ友をつくらないといけないと思っていて、人付き合いの苦手なお母さんには重荷であったこと、反抗期という子どもの成長では当たり前の姿も、自分の子育てがうまくいってないからだと、自分を責めていることなどがわかってきました。スタッフそれぞれの子育ての失敗談などもしながら、ゆっくりお母さんの気持ちを聞かせてもらうようにしました。

しばらくすると、いつもお母さんの背中に隠れていたひろちゃんは、スタッフを意識して声掛けを待っていたり、同年齢のお友だちと一緒に遊ぶようになっていました。子どもの変化と共に、お母さんの表情も少し明るくなり、他のお母さんと談笑する姿も見られるようになりました。

お母さんの胸の中には、まだまだいっぱい聞いてほしいことがあるようですが、少しずつ心はほぐれてきているようです。自分のできなさや情けなさは、なかなか人に打ち明けることはできないものです。心の中を打ち明けてくれたお母さんには、とても勇気が必要だったと思いますが、スタッフを信頼してお話してくれたことに感謝しています。ひろちゃんの成長を、お母さんと一緒に実感できる喜びも感じます。「ここなら私のことを話しても大丈夫。」「ちょっとしんどいことも言ってみようかな？」と思ってもらえる、温かい雰囲気を大切にしたキッズプラザでありたいと思います。今日流した涙は、きっと明日の元気につながると信じています。

今日は、ひろちゃん来てくれるかな？　手遊びのリクエストは何かな？

親子のオアシス

石原美希（岐阜県）
美濃市地域子育て支援センター
ひよこくらぶ

魔の二歳真っ只中の二歳九か月の娘と九か月を迎えたハイハイ好きの息子。この二人に振り回されている母。家の中ではおてんば娘を追いかける日々。娘には「怒り虫」にしか見えないだろう。母もまた「大好きな娘なのにまた怒ってしまった。」と思ったそんな時は子育て支援センターへ。

支援センターでは息子を先生や他のお母さんが見てくれる。その間私は娘といっぱい遊び充実した時間を過ごすことができる。娘への愛情を再確認できる時間。また他の人と接している息子の笑顔を見て愛しさを感じる。いっぱい遊んだ子供達は家に帰ってからたくさんご飯を食べお昼寝をする。その間母は束の間の休息タイム！

支援センターへ行った日は母の気持ちにゆとりができ、笑顔が多いような気がする。仕事から帰宅した父にも笑顔でお出迎え。

きっと支援センターは親子が笑顔になれ、子育ての楽しさを再確認できる場所では？　いつも心に栄養をもらって帰る。もし支援センターを利用していない人がいるならぜひ来てみて。きっと素敵な出会いと新しい発見があるはず。私たち親子が感じたように。

日ごろ頑張っているお母さん！　肩の力を抜いて子育てしましょう。周りの力を借りて。そのひとつが子育て支援センターですよ。

子供達が導いてくれた空間

柴山亜記（栃木県）
さくら市地域子育て支援センター
たんぽぽ

「子育て相談なんですが…」震える手で私は市の保健センターに電話をした。

この頃、二歳三ヶ月の息子と四ヶ月の娘の育児に、私は今にも自分自身を見失いそうだった。息子は、娘の存在にまだ理解がなかったのか、日々重なる我慢に、夜泣き、癇癪がひどくなっていた。娘は、とにかく泣いてばかりいて、抱っこをしていないと泣いていた。こんな毎日の中、なぜ泣いているの？　私はどうしたらいいの？　私の頭の中は「？」とストレスで限界にきていた。同居をしていたが、なかなか育児の苦痛を本音で言えず、家族の中で私だけが孤立している気がしていた。

そんな中、限界の果てに勇気を出して電話をしたのが保健センターだった。様々な悩みを話し、保健師さんから紹介されたのが、子育て支援センターだった。聞けば、車で五分の所にあった。

次の日、さっそく子供達と支援センターを訪れた。あの日、ドアを開けた時の風景を、今でも忘れない。この日は、私の人生、育児に対する想いを一八〇度変えた日だった。ここには、もう一つの家庭の様な雰囲気があった。子供達が伸び伸び遊び、親同士が育児の話を楽しそうにしていた。私の悩みを言うと、すぐに「うちもそうだった。」と共感の声が聞けた。私が、ずっと一人で悩んでいた事…自分ばかりが…と思っていた事は、育児をする中でよくある事であり、子供の成長の一つなんだと、初めて気づかされた。なんだか胸が高鳴り、悩みを話しているのに、嬉しくなった。

この日から、支援センターに毎日の様に通っている。息子の夜泣きはもう無い。娘は、相変わらず泣くが、伸び伸び自己主張の強い子に育っている。

今でも育児のイライラ、苦難はあるが、私は、以前の私とは違う。支援センターの先生をはじめ沢山の仲間という、自分を支えてくれている人達がいる。息子や娘が、私の今の生活へと導いてくれた。支援センターの香りが、私はとても好きだ。小さな部屋に、沢山の愛情がある気がする。

楽しい毎日への一歩

岩永千秋（長崎県）
時津町子育て支援センター
「こばとの家」

「私がお母さんになんてなれるのかな。私だってまだ子どもなのに…。」

そんな不安な気持ちでいっぱいの中、私は19歳の時に子どもを授かり、母親になった。もちろん子どもは可愛くてたまらない。だけど…。

生まれて初めての育児は分からないことだらけ。周りに子どもがいる友だちもいない。子どもと2人きりで家にいる毎日。外でママさん同士が子ども達を連れて一緒に遊んだりしているのを見ると、うらやましくなる。

「私にも子どもにも、同じような友達が欲しいな。」子どももうすぐ1歳。動き回るようになって外に出たそう。そんな時、引っ越し先の町に、子育て支援センターがあることを知った。「行ってみたいけど、ママたちのグループとかできていたら入りづらいな…だけど、この毎日から抜け出したい。」そんな思いのもと、支援センターに一歩踏み出した。初めての支援センターは、私も子どももドキドキ。だけど、支援センターの先生に温かく迎えられ、ママたちに話しかけてもらったりして、少しずつ緊張がとけてきた。

それから2年半。最初は泣いてばかりの子どもが、今ではすっかり行くのが楽しみになっている。「ママ早く行こう行こう。先生とお友達が待っているから、急がなきゃ。」私も、子どものことですごくすごく悩んでいる時、「うちもそういうことあるよ。」「お母さん、本当に頑張ってますね。」と、ママ友だちや先生に言われた一言で、本当に救われた。「悩んでいたのは自分だけじゃないんだ。」

先生も、子どものことや私のことまでよく見ていてくれて、温かい言葉をかけてくれて、モヤモヤしていた心がすーっとなって、またがんばろうって思える。「支援センターの先生方、支援センターに来ているママさん、子どもちゃんたち、いつも元気を、勇気をくれてありがとう。」

父親に子育ての楽しみを教えてくれた支援センター

芝元憲太郎（千葉県）
社会福祉法人生活クラブ
流山わらしこ保育園子育て支援センター

「来週から私が子どもを連れて遊びに来てもいいのでしょうか・・・？」改めてこうスタッフに確認しなければならないほど、私は委縮してしまっていた。三月末に妻と初めて訪れた「子育て支援センター」は、まさに女性と子どもだけの世界だった。

四月から父親の私が昼間一人で育児をする。復職する妻に代わって育児休職を取得したのだ。期間は子どもが一歳になるまでの三ヶ月半。しかも子どもは姉弟の双子。妻の両親が近くに住んでいるとはいえ、不安はとてつもなく大きかった。「どこか子ども達が安心して遊べる場所はないだろうか」と市から配布されたガイドブックで見つけたのが、子育て支援センターとの出会いだった。

いよいよ始まった育児生活は想像をはるかに超える忙しさだった。最初は外出もままならなかったが、やがて慣れてくると、ベビーカーを押して支援センターに通うのが楽しみになってきた。当初は父親一人で躊躇したものの、育児の話題にはおしゃべりの輪に入ってワイワイガヤガヤ。オムツサイズの決め方や、離乳食の具材の固さなど、母親の皆さんと同じ話ができる自分がちょっと恥ずかしくもあり、自分が育児をやっているんだという嬉しさもあった。突然の雨に見舞われて開放時間外に雨宿りさせてもらったこともあったが、普段なら仕事をしているはずの時間に子どもと雨宿りなんて、何とも贅沢な時間を過ごしたことも忘れられない出来事だ。

私の復職と同時に、子ども達は保育所通いをスタートした。支援センターは卒業したが、「たまには遊びに行きたいなぁ」と私自身が考える今日この頃である。今ではすっかり自己主張盛りの二歳になった娘と息子を追いかける毎日だが、子育ての楽しみは十分満喫している。この楽しみを教えてくれた支援センターの存在をもっと多くの父親に知ってもらいたいと切に願っている。

ひろばの新入りさん

土・日のひろばはパパたちでいっぱいです。初めはママに連れられて落ち着かない様子でいたパパも、日曜日の「ティールーム」ならのんびりしていきます。
おじいちゃん・おばあちゃん・小学生の兄弟や中学生・高校生になるスタッフの子ども達・大学生やサポートグループのボランティアさんなどなど・・・大人だけで来て、気軽にお茶を飲み、声をかけ合う「大きな家族」みたいに自然な居場所となっているからだと思います。

浅間理絵（石川県）
金沢市教育プラザ富樫子育て広場「こあら」

のびのび育児

エミリオ40（東京都）
寿子ども家庭支援センター

初めてセンターを利用したのは、桜がきれいに咲く4月。病院で知り合った友達から「わくわくに行ってきた。」とメールをもらった。「わくわく」って？　訳あって、知識も体力も無く始まった育児は、もう手いっぱいだった。けど、我が子に、そして親子で少しでも楽しい時を過ごしたい。そう思い、術後の傷も痛む4ヶ月の時、初めてベビータイムに参加した。息子の名前に「ちゃん」、自己紹介は、お歌にのせて～。私の過去20年間のビジネスシーンからは、かけ離れたその活動に一撃された。その夜、夫に「こっぱずかしかったが、がんばった。」と報告したら、「四十女でも歌えるものも作ってもらえ。」と提案された。
　息子6ヶ月の頃、ぐんぐん大きく育つにつれて、怪我や病気が頻発するようになった。そこで安全でおもちゃがいっぱいなセンターの広場に、遊びに行くようになった。ほぼ息子と二人きりの生活から、社会に出てきた気分だった。欲しくて欲しくてやっと授かった子だったから、幸せで、楽しいばかりの育児生活が始まると夢見ていた。しかし、そのギャップにへとへとになってしまいそうな時もある。そんな時、センターに行くといろんなことがふっと楽になる。先生に育児相談できる、ほっ。ちょっと目が離せる、ほっ。他のお友達やママの様子も知ることができる、ほうっ。楽しそうに息子がおもちゃで遊んでる、にこっ。もう広場の子、部屋のインテリア等すべてがかわいい。同年代のお友達を誘って遊びに行った時、彼女はこう言った。「こんな広場できたの、いつなんだろうね。最近？じゃあ、あたしたち今生んでよかったね。」

インドネシア人のママ友達との出会い

豊巻智子（岩手県）
北上市立大通り保育園
地域子育て支援センター

「お子さんは、何才ですか?」と、偶然私の隣に座ったママに、思い切って声をかけた。

娘も、偶然そのママの息子さんと一緒にブロック遊びをしていた。その日も支援センターは、たくさんの子ども達で、にぎわっていた。

そのママは、日本人ではなく、小麦色の肌で、ニコニコ顔が私の心に残った方だった。

彼女は「息子は三才です。」と一言。私は、「娘は二才です。一緒に遊んでくれてありがとう!」と心を込めて言った。

私は思い切って「どこの国の出身ですか?」と質問した。「私はインドネシア出身です。」と自分の国のことを聞かれ、目を輝かせて教えてくれた。

私は娘と二人で、〝たくさんの出会い〟を求めて、北上市子育て支援センターへ遊びに行っていた。毎日多くの出会いがある中で、今回の彼女との出会いは、私の心の中に残る素晴らしい出会いであった。

私は、五年前、新婚旅行でインドネシアを訪れた経験があった。

私達は、彼女の故郷〝インドネシア〟について話しをした。彼女は故郷インドネシアについて、目を輝かせて、私に話してくれた。そして、私に「智子さん、私に声をかけてくれてありがとう。嬉しかったわ!」と目を見て握手してくれた。

偶然、隣に座り、思い切って声をかけた事がきっかけで、彼女との交流が深まり、今でもずっと続いている。一緒に子ども達を連れて、電車の旅にも出掛けた。彼女と、共に助け合い、何でも話せる仲になった。

北上市子育て支援センターへ遊びに行った事がきっかけで、インドネシア人のママ友達が出来、私も心強く感謝の気持ちでいっぱいだ。支援センターで出会った、インドネシア人のママ友達。私と彼女の交流は、支援センターのおかげで今も続いている。

なんくる家（や）は私の故郷（ふるさと）

黒石恵子（沖縄県）
みどり子育て支援センター
「なんくる家」

私が「なんくる家」と出会ったのは、今からもう十年前。一番上の娘、只今十一才が一才九ヶ月の頃。急な転勤で福岡から沖縄へ。九十九パーセントの不安と、たった一パーセントの期待。右も左もわからない土地での初めての子育て。どんなに淋しく心細かったか・・・。でも立ち止まってはいられないと思い、市役所で「なんくる家」を教えてもらったのです。ウチナー口（くち）が飛び交う一軒家。私と娘は居場所を見つけることができました。何ヶ月か過ぎた頃、運動会に参加しました。お遊戯とかけっこ。生まれて初めての運動会に、少し緊張気味でしたが楽しい思い出となりました。数日たったある日、先輩ママから「さ～や、運動会が終わって変わったね。ママと離れて友達と遊べるようになったさ。成長しているさ～」と。この言葉がどれだけ嬉しかったことか。沖縄に来て「一人で子育てがんばらないと」と、肩に思いっきり力をいれていた私。自分の子どもをちゃんと見ていてくれる人がいるということ。私は一人じゃないんだと肩の力が抜けていくのがわかりました。

それから二人目が生まれ、三人目を妊娠中、つわりがひどく動けない私を心配し、長男を預かってくれる友達も「なんくる家」で出会った一人です。「今から迎えに行くからね」と毎朝のメール。毎日預かるということは、本当に大変な事なのに「大丈夫よ」と笑顔で自宅まで来てくれることに心から感謝しました。もちろん今でもその方の家に遊びに行きます。まるで実家を訪ねる様に・・・。

お弁当を全部食べたと自慢気に見せる子供に歓声があがります。トイレトレーニングはもってこい、「えらいねー。すごいねー。」とみんなでほめまくります。自分の子供がほめられる、それだけでママは幸せを感じられるんですよね。私はここでたくさんの人に出会い、そして助けられました。だからこそ地元を離れ沖縄で子育てを続けられたんだと思います。

泣いてしまった日

そよかぜ（神奈川県）
南足柄市岡本子育て支援センター

「来てくれてありがとう」「こちらこそ、ここに在ってくれてありがとう、ですよ。」ある日の子育て支援センターのアドバイザーさんとのあいさつです。子育て支援センターにはお世話になって三年目。

最近の強烈な記憶は、長女の反抗期。七月の朝、二歳の長女は些細なことがきっかけで機嫌を損ね、室内の物や私の行動など様々なことに文句をつけ暴れ始めたのです。当時十ヶ月の次女もつられて泣き、部屋は大惨事に。二時間ほどが過ぎ、限界を感じた私は泣く子をよそに身支度し、長女をベビーカーに、次女を背負ってセンターへ歩き出しました。普段は楽しい道中、助けてもらいたい一心で。

到着すると、迎えてくれたアドバイザーさんに「大変だったんですよ。」と口にするや否や、涙がはらはらとこぼれてきました。腰を下ろし、子どもを前に大声で叫んだと話すと「いいんじゃないですか。お母さんが本当に大変なときは、気持ちをそのまま出しても。」と柔らかく、かつ真剣な言葉。今朝のできごとを話し続けるうち、心のとげが落ちていくようでした。いつの間にか子ども達は遊びだし、私は呆然としながらも、安心して気持ちを吐露できるこの場所に、しみじみと感謝を覚えたのでした。

子育ては、自宅で孤独に頑張っていては、対決モードに陥りがち。センターではふと肩の荷が下り、前向きな解決策を得られることがあります。また、親子とものびのび自分を解放することで、心身ともに充電でき、より愛情をこめてわが子を抱きしめられるようになると実感しています。幸い、今夏の一件以降涙を流したことはありませんが「大変なことって繰り返すよね。」とアドバイザーさんと笑って話しています。我が家の笑顔の子育ては、センターの支えがあってこそ。最後に、より多くの親子のためにも、徒歩圏内にこのような場が増えることを願っています。

僕のことを見て

山下知子（山口県）
大坪子育て家庭支援センター

「妹さんを抱っこしていてあげるから、お兄ちゃんの所に行ってあげていいよ。」

この頃、息子は二才、娘は0才。わんぱく盛りの息子の後を、娘を抱っこしたままで追い掛けている私の姿を見て、先輩ママが優しく声を掛けてくださいました。

その言葉は、二人の子育てに慣れていない生活で、余裕の無かった私の心に優しく入り込み、癒された瞬間でした。

二才の息子にとって、生まれてきた妹の存在は、どのように映っていたのでしょう？　ママを占領しているよその赤ちゃんと感じていたのかな？

ママを独占したい年頃の息子に、たくさんの我慢をさせていたのだろうな。

その頃の息子は、まだお友達との関わり方が分からない為に、思いが伝わらず、毎日のように衝突ばかりしていました。

息子を止める私の顔は、目を光らせ睨みつけている鬼のような感じでした。口で止めながらも、息子の手を力を入れて握りしめてしまい、痛い思いをさせた事もあります。そんな自分が嫌で、何度落ち込んだでしょう。

そんな時に支援センターの先生方、何よりもママ友達と話をして、その方達が共感してくれ、一緒に涙を流してくれた事で、どれだけ救われてきたでしょうか。

ここに来れば誰かがいて、私を見てくれ、話を聞いてくれるんだという事が嬉しかったのです。

息子はきっと「ママ、僕を見てよー」と言っていたのだろうと思います。

あれから一年が経ち、妹は兄の後を追い掛けながら遊び、二人共、たくさんの表情を見せてくれます。笑ったり、泣いたり、喧嘩をしたり、この瞬間を二人で楽しんでいます。

私もいつか後輩ママに優しい言葉を掛けてあげられるように、今を大切に過ごしていきます。

私の大切な「離れ」

富田　恵（長崎県）
西浦上地区子育て支援センター
ぴよぴよ

私の家が「母屋」なら子育て支援センターは「離れ」。同じ敷地内を行き来するように堅苦しくなく、のびのび過せる場所。そこが、私が通っている「ぴよぴよ」です。

約一年前やっと一歳を迎えたばかりの娘を抱き、不安と緊張で身を縮めながら初めてぴよぴよを訪ねました。スタッフの先生方は温かい笑顔で優しく迎え入れてくれました。こんな場所があるなんて・・・安心とやすらぎで胸がいっぱいになった事を今でもはっきりと覚えています。

それから度々顔を出すようになり行くたびに先生がそっと近寄ってきてくれて、子供さんは夜寝てる？　旦那さんは育児してくれる？　などこまめに声をかけてくれました。何度同じ相談をしても嫌そうな素振りをみせず、毎回アドバイスをくれました。調子に乗って主人への不満も相談してしまい恥ずかしいと思いましたが「いいのよ」と微笑んでくれて最後まで話を聞いてくれました。先生の優しさに日々感謝していました。

お陰で現在は、家庭円満で明るく楽しい日々を過ごせています。子育て支援センターと言うより父母支援センターだと思います。未熟な私をそれなりの母親にしてくれて、独身気分の抜けない主人を立派な父親にしてくれました。きっと一人で子育てしていたら、今の娘の笑顔はないと思います。私にとってぴよぴよは家そのものです。なくてはならない大切な存在です。

そんな私も今では「常連さん」と呼ばれ他のママさんの悩みを聞きます。先生方にはかないませんが、自分なりに悩みを抱えているママさんを助けて行けたらいいなーと考えています。日々笑いの絶えない支援センターであるのも先生方のかもしだす温かい雰囲気のお陰です。一生忘れない、一生私にパワーをくれる・・・もらってばかりでなんですが、いつか恩返しを！　と考えています。私たちの大切な「離れ」がいつまでも存在していきますように。

こどもの背中

今日は楽しみにしていた支援センターの運動会。
まだたっちできない3人はお座りのままポニョのダンス。マラカスはママの手作りで、シャカシャカと音がなるのがお気に入りの様子。そんな後ろ姿を見ながら、センターに通い始めた頃を思い出したよ。まだねんねの赤ちゃんだったね。今では、はいはいで自由に動き回るわんぱくな男の子に成長したよ。それと同時にママも少しは強くなったかな。これからもぽかぽかあたたかい気持ちにしてくれるセンターで、お友達や先生やママ達といっぱい遊ぼうね。

大村華奈（福岡県）
飯塚市立頴田子育て支援センター

出会いの場 わらべに乾杯！

鍵山その子（茨城県）
土浦市子育て交流サロンわらべ

当時私はボロボロだった。産休前は教員としてバリバリ働いていた。社会からの疎外感。おまけに息子はアトピーだった。夜中痒がって何度も起きる。一晩中抱っこで歩き回った。食物アレルギー。母子共に魚、野菜、塩のみの食生活。ジャガイモや玉ねぎにまで反応して突然のじんましん、病院に駆けこむ日々・・・。

それでも周囲に弱さを見せられずにいた。ママ友と呼べる人は何人かいたけれど、私にとってママ友は「子どものために一時的に仲良くする友だち」という定義だった。真の友だちとは違う、距離を置いた関係。アトピーのことを話題にすることはあっても本当の辛さや悩みを打ち明けることは無かった。

そんなとき一週間実家に帰った。久しぶりに訪れた「わらべ」でママ友たちが「おかえりなさい」と声を掛けてくれた。その言葉は思いのほか温かかった。凍りついた心が溶けていくような気がした。

その日私は素直な気持ちで子育ての悩みを打ち明けた。「なんでうちの子アトピーなの？　パパも私もアトピーなんかじゃなかったのに！」そんな私の問いかけに「ひかる君にはどっちにも似ていない素晴らしい部分が他にもたくさんあるってことだよ。」と言ってくれたママ友がいた。それってすごい！　目からうろこが落ちる思いだった。

思えば毎日毎日会って他愛も無い話をすることで私は随分救われていたなぁと。いつのまにかママ友は私にとって大切な真の友だちになっていた。突き詰めて考えれば人と人、ママとかママじゃないとか関係ないこと。無意味な壁を作っていた自分が恥ずかしかった。

あれから5年、長男は5歳、次男は2歳、昨年10月に三人目が生まれた。ママ友たちとは今も毎日のように会っている。大切な友だちだ。「わらべ」には時々思い出したように訪れる。そこには変わらぬ温かさがある。私がママ友と出会えたように、素敵な出会いを提供し続ける「わらべ」に乾杯！

ソリソリはしれ 笑顔を乗せて

「よいしょ、よいしょ」
今日も活躍しているこのソリ、実は、2年前のクリスマスにサンタさんがプレゼントを乗せてきた物。さすがにくたびれてきたかな？
あれから毎日のように、子ども達やお人形、ボールや電車のおもちゃなどを乗せて大活躍。ついこの前まで「ママ引っ張って～」って言っていた子も、今日は引っ張ってあげている。すごいね。
これからも、いろんな物をのせて遊ぼうね。
今日もみんなから元気もらっています。

金川直美（香川県）
ＮＰＯ法人わははネットわはは・ひろば高松

つながり

川島友紀子（北海道）
帯広市地域子育て支援センター
あじさい

昨年度十二月、支援センターあじさいでクリスマス会が行われた。

支援センターを利用するお母さんたち手作りのクリスマス会。約二ヶ月前から有志のみんなで話し合い、準備を進めてきた。劇班と音楽班に分かれ、週一回三十分程度の練習。もちろん広場内での練習のため、子どもたちは抱っこしたり足元で遊ばせながら。

子育てしながら何かに取り組む、という事は決して楽なことじゃない。子ども同士のトラブルだってあるし、日々家事育児に追われる中、同じ場所に通うのは体力も使う。それでも、みんなで力を合わせて一つの事に取り組む時間が楽しかった。まるで学生時代の文化祭。お母さんになっても輝けるんだ。一人一人が持っている長所や特技、それを発揮できる場が家庭以外にあるなんて思ってもみなかった。本当にありがたい。当日、私は音楽班で新沢としひこさんの「ともだちになるために」を一生懸命覚えた手話にのせて歌った。

そっか、私たち、友達になるためにここ（支援センター）で出会ったのかもしれないなあ。

子ども達が引き合わせてくれたつながり、あぁお母さんになって本当に良かった。気持ちよい程の達成感、こんな感情を抱けたのも思えば久しぶりだった。

出会った頃のあじさいは、まだ開園したばかり。遊具の配置から、支援センターそのもののあり方まで摸索中、という様子だった。だけど、迎えてくれた先生方の笑顔と言葉が温かく、「あーまた来てみよう」と思った。気がつけば週三のペースで通い、ハイハイしていた息子が走り回り、会話だってできるように。けんかしながらもお友達と楽しく遊んでいる。

実家が遠い私にとって大きな心の居場所となったあじさい。そこへ行けば必ず先生がいて、友達がいる。子育ての喜びも悩みも分かち合える。他愛のない会話で笑い転げたり、時には転勤していく友だちに涙したり。一人じゃない、みんなで子育てしていけるって幸せだね。

私は、今日もあじさいに行く。人と人のつながりを求めて・・・。

ずっとひろばがあるといいな

成迫珠李（神奈川県）
おやこの広場びーのびーの

私は一才になる前、はじめて「びーのびーの」のひろばに行きました。その時のことはあまりよくおぼえていません。でも、二才ぐらいの時のことならおぼえています。けん太ろうお兄さんや、元田さんというボランティアの大学生のお兄さんが来ていました。とてもやさしくて、いつもいっしょに遊んでくれました。おままごとをしたり、おしゃべりをしたり、高い高いをしてくれたり、—とてもおもしろくて楽しかったです。

もう一つ楽しかった事があります。それは、ゆりちゃんといっしょに遊ぶ事です。二つ年上のゆりちゃんは、みんなのリーダーのようなそんざいで、小さい子たちがいつもまわりに集っていました。ゆりちゃんがいつもひろばでキャッチボールをしているお兄ちゃんたちに、

「うるさい、しずかにしてよ!」

とおこってくれて、リーダーというより、先生みたいなものでした。でも私たちにはとってもやさしくておもしろかったです。

びーのびーのは商店がいの中にあるので、「はじめてのおつかい」もけいけんしました。みんなで百円玉をにぎって八百屋さんにドキドキしながら行ったのをおぼえてます。ちょっとお姉さんになった気分でした。

でも、私はお父さんの転きんで中国の香港にいってしまいました。だからびーのびーので遊べなくなってしまい悲しかったです。

二年後、また日本にもどってきました。

学校がいそがしくてあまり遊びにいけませんが、三年生の今もフリーマーケットや、玉ねぎほり、科学講座などいろいろな楽しい行事にさんかすることができました。

また、学校の帰り道、ひろばの前を通ると、いつもスタッフの人たちが、声をかけてくれるのでほっとします。ひろばの前の薬局のおばさんも、おぼえてくれているので、ちょっとてれくさいです。

小さい子どもから、お年よりの方までみんな楽しめるびーのびーののひろばは、すごいと思います。

これからも、ひろばがどんどん世界中に広まっていってパワーアップしてほしいと思います。

初めての支援センター

平尾晋太郎（山口県）
長門市社会福祉協議会
子育て支援センター☆つどいの広場

私が支援センターを初めて利用したのは、娘が一才五ヵ月の時である。

私は、日頃、何度も支援センターを利用した事のある妻から話には聞いており、知ってはいたが、利用した事はなく、この先も利用する事はないだろうと思っていた。しかし、機会は突然やってくるものだ。普段は、妻がセンターを利用している間に、私が家事をするのが休日の日課となっていた。その日は、ロゲンカとなり、勢いで「娘をセンターへ連れて行くから、お前が掃除をしろ。」と言ってしまった。妻は、行けるはずがないという感じのニヤニヤ顔で、「いってらっしゃい。」と即答だった。私は、娘と二人で支援センターはおろか、出かけた事などなかった。娘は極度の人見知りなのだ。

まず、泣かないかとドキドキしながら、娘をチャイルドシートへ乗せ出発した。再々、バックミラーで娘の機嫌を確認し、何度か引き返そうかと悩みながらも、何とかセンターへたどり着いた。緊張しながら、センターへ入ると、私が一番のりだった。女性の職員の方と対面し、優しそうで話しやすそうな印象に緊張がほぐれた。娘は慣れているセンターで泣く事はなく、オモチャなどで遊んでくれた。ママの輪に入っていけるか不安もあったが、男の私が珍しい様子で、どのママさんも話しかけてくれ、談笑できた。あっという間に二時間が過ぎ、終了の時間となった。ママさん達との意見交換で、改めて育児と家事の大変さを感じ、妻への感謝の念が素直にもてた。今後は、積極的に娘と外出し、妻にも一人の時間を作ってあげようと思った。父親として、娘と楽しく接する、自信ときっかけをもつ、充実した一日となった。

「子どもの夢が育つ場所」は「親の夢も育つ場所」

深沢美紀子（山梨県）
ますほなかよし児童館

女性は子どもができると生活に制限ができ、ストレスが溜まることが多い。児童館に来ている人たちも「家にいるとイライラする」「大人と話す時間を持ちたい」などストレスを抱えているようだった。私もその中の一人として児童館へ通っていた気がする。温かく迎えてくれる先生方や同じ境遇のお母さん方とお話しすると、気持ちが軽くなり優しいママとして一日を過ごすことができたからだ。

そんな生活にも慣れて来た私は、得意のダンスを身近なお母さん方に教えることに決めた。妊娠や出産で体型が崩れ、コンプレックスを感じている人がほとんど。しかも皆、抱っこやおんぶで肩こりや腰痛にも悩んでいた。児童館で出会った先生やお母さん方が、勇気のない私の背中を押してくれたのだ。

自信はなかったが、私は児童館でダンスのレッスンを開始した。体に不調を感じている人が少しでも楽になれたら・・・ストレスを感じることなく、明るく人生を歩んで行けたら・・・。

そして我が子と笑顔で向き合って生活して行けることが、私の一番の願い。体を動かし音楽を心に取り入れるだけでも、一緒にレッスンを受ける人たちと交流を持つだけでも、素敵な生活に繋がる一歩となる。

核家族化が進むこの世の中、母親の体と心にかかる負担は想像以上で、自分ひとりで子どもの人生を背負っている様な気持ちになる人も多いと思う。そんな時、同じ境遇の人の輪に入り心を和ませられる児童館のような場所が、大切な空間となるのだ。そして時には、母親も自分の人生を楽しみ夢を持つことが、我が子に笑顔を向けるという意味でも必要だと思う。少なくとも私は、夢と生きがいを持つことで子ども達との生活を心から楽しむことができるようになった。だから今度は私がみんなの力になりたいと考え始めたのだ。私が勇気と自信をもらったこの「児童館」で。

さいのこなつまつり

原澤優里（埼玉県）
さいたま市子育て支援センター「さいのこ」

「ぬまぞう おんどで ヨヨイのヨイ！」二歳の娘が風呂場で元気良く歌っています。曲は「かもめの水兵さん」の替え歌〝ぬまぞう音頭〟。

この歌と踊りは二〇〇九年の夏、子育て支援センターさいのこで行われた夏祭りで生まれました。

「ねぇ、夏祭りでこういうのがしたいんだけど、手伝ってくれませんか？」支援センターのスタッフさんがママ達に頼んできます。最初は、「えっ、私が？」といった感じで乗り気でなかった人も、いつの間にか部屋の片隅に集まり、準備に加わっていました。〝ぬまぞう音頭〟の歌詞と踊りもママ達が協力して作りました。会場の飾りつけや遊具作りもしました。

私は、紙芝居〝ぬまぞうと踊ろう〟を作りました。こどもの面倒を見ながら、お祭りの手伝いをするうちに、ママ達は次第に打ち解けてきました。

お祭りの日、会場の公民館にはたくさんのパパとママと赤ちゃん達が集まりました。

リコーダーグループが演奏する、澄んだハーモニーが会場に響きます。大人も赤ちゃんも耳を澄ませているのか、しーんとしています。

次は、私の紙芝居。拍手をもらって、ほっ。それから、輪になって〝ぬまぞう音頭〟を踊りました。「ぬまぞう音頭でヨヨイのヨイ」のサビのところで、右手を右上、左手を左下にして〝ぬまぞう〟のポーズを決めます。

〝ぬまぞう〟のキャラクターは、地域の地図作りをした時に生まれました。「見沼区の形って、キャラになりそうだね。」誰かが言った一言が発端となり、イラスト、マスコット、踊り、紙芝居と連想ゲームのように広がりました。

お祭りは大成功。皆で作り、皆で楽しむことができました。楽しいことを一緒に体験する中で、さざ波のように人の輪が広がります。

子育て支援センターは、こどもと、こどもを育てる親を支援してくれる場所なのではないでしょうか。スタッフさんの笑顔に見守られながら、こどもと一緒に成長していきたいです。

時間が流れてもかわらない場所

つどいのひろばに集まるママたちで「ママの視線で作る幼稚園ガイド」をコンセプトに編集委員会を立ち上げ、つどいのひろばで子どもたちを遊ばせながら編集会議を行った時の１コマです。
やんちゃ盛りのわが子を連れて何度も何度も足を運んだ取材は想像以上に大変でしたが、完成品を手にすると「幼稚園選びに少しでもお役に立てればうれしいし、社会活動に参加したという達成感でいっぱいです」と笑顔で話してくれました。

せよこ（千葉県）
そうふけつどいの広場

作るぞ！居場所、そして・・・

藤岡邦子（東京都）
NPO法人こあら村子育て交流ひろば「ぽけっとぱ～く」

「もういい加減にしないと、見学のママがひいてるよぉ！」今日もT子さんと私の軽口で、こあら村の子育てひろばに笑い声が響きます。”準スタッフ“とあだ名されるT子さんは、もう6年来の常連さん。彼女がこあら村に初めて見学に来た日の様子は忘れることができません。

T子さんは、子どもを連れずに、見学というよりは偵察にやってきました。伺うと、「1歳の子どもSがいるが、食物アレルギーがひどく、遊びに行く場所がない。」と途方にくれた様子。私たちスタッフは、総力をあげてT子さん親子を迎える環境を整えることにしました。5大アレルゲンは言うに及ばず、たくさんのものに反応があり、パンを持った手で触られたらそこが赤くなってしまうようなSちゃん。居合わせた方に、スタッフはSちゃんの事情を伝え、協力をお願いしました。皆で一斉に昼食をとり、それ以外の飲食には配慮を。食後の手洗いや掃除をする。歩き食べはしないなどなど。皆さんが気持ちよく応じてくれたことがとても嬉しく、頼もしく感じました。今では何も言わなくても心得た方が掃除機を出してきたり、床を拭いたり、素晴らしい連係プレーです。T子さん親子のおかげで、お互いを気遣う気持ちが、こあら村全体に育まれたと感じました。「居場所」を確保できたことでT子さんは、持ち前の聡明さで周りの人に元気を振りまいてくれる存在になり、今や三児の母となりました。

彼女がふと漏らした言葉が、今の私の課題です。「ぐりとぐらのかすてらとか、絵本や歌にはSの食べられないものばかり。」楽しい子どもの本や歌でつらい思いをする人がいるなんて思いもよりませんでした。それからは折に触れ本や歌に出てくる食べ物に気を配るようになりました。「こあら村がなかったら三人も産めなかった。」というT子さんの言葉に応えるためにも、どんな子どもにも楽しめる本や歌を伝えて、居心地の良いひろばでありたいと思います。

支援センターがくれたつながり

村山順子（群馬県）
ももの木地域子育て支援センター

身寄りがない土地で、私のはじめての子育てがはじまりました。家に缶詰で、夜泣き、後追い、授乳、おむつ交換、離乳食、家事が私の生活の全てでした。ほとんど誰とも会話を持つことが出来ない状態で、二十四時間休みなしの育児。「この子は、自分を困らせるためにいるのでは？」自分が望んで産んでおいて、そんな考えがよぎる自分に日々罪悪感を覚えていました。

ある日、泣きながらすがってくる子を大きな声で怒鳴り散らしてしまいました。這いながら私を見上げる息子の怯えた目。立つこともまだ出来ない赤ちゃんなのに・・・。自分が情けなく、また子どもに申し訳なく、涙が出てきました。それと同時に体から湧き上がってくる強いやり場のない怒りが自分でも恐ろしくなり、「十五分でも三十分でも預かって」わらにもすがる思いで託児所へ。しかし断られてしまい、途方にくれ、頭が真っ白になってしまいました。

そのとき「支援センターの先生ならきっと話を聞いてくれる」ぼんやりした頭で、支援センターに電話してしまいました。「お母さん一人では子育ては無理。抱え込んではいけない。」と、子どもを慈しんで育てられない私を責めることなく、励ましてくださいました。

「あなたのような孤独なお母さんが一人でも救われるように、お母さん同士が助け合える場所があったらいいと思わない？　できることはなんでも手助けするよ」と先生が提案してくれたのが始まりで、子どもを交代で預けあう「子育てサークルあおぞら」が産声をあげました。

活動では、子どもの声が支援室にこだまし、ママがいる子まで泣き出したり、本当に賑やかでした。母親たちは預けあいを通して学びあい励ましあい、子どもたちはいろんな大人とかかわりながら遊び、まるで大きな家族のようでした。子育てで大事なことは、すべて支援センターが教えてくれました。人間関係が希薄な今であっても、人と関わることでしか解決できないこともあるのだと気付かされました。二年四ヵ月の支援センターでの時間は、私たち親子の宝物です。

ありがとう。と言える日

岡本亜希（神奈川県）
地域子育て支援センター
ふるいちば

生まれた時に、病気があった息子は手術や検査など入退院を繰り返した事もあり生後7ケ月の頃には、すっかり赤ちゃんらしい無邪気さを欠き、強度の人見知り、場所見知りをするようになっていて、この事が私にとって大きな悩みとなっていた頃のこと。

支援センターの門をくぐると「こんにちは、ゆっくり遊んでいきなさい。」私の父ほどの年齢のボランティアさんが植物の世話をしながら声を掛けてくれた。足を悪くされているようで真夏の強い日差しの下、杖をつき片足を引きずりながらの水やり。息子は表情を固くしてニコリともしない。それでもボランティアさんは「たくさん遊んでいきなさい。」と言葉をつづけながら優しい笑顔を向けてくれた。

初めての子育てに右往左往し、不安や疑問を抱えては育児書を読みあさり、インターネットで情報を得ては情報ばかりが先行し、また新たな不安を抱く。そんな事を繰り返していた私にボランティアさんのその声掛けは活字では得られない安心感を与えてくれた。そして息子以上にナーバスになっていたのは私だと気付かされた。子供達のために、こんなに綺麗に手入れされている庭、桃太郎の劇の流れてくる大きな桃も迫力のある鬼の絵も、全てボランティアさんの手作りだという事、センターの職員さんがいつも気持ち良い挨拶をくれる事。

少し視線を上げてみると子育てを支えてくれる人たちの手がとても身近にあった。ねえ、一真。元気になるためにたくさん痛い思いや怖い思いをしたね。でもパパやママ以外にも一真に優しく笑いかけてくれる人がいっぱいいるよ。いつかあのボランティアさんに「また遊びに来たよ。いつもありがとう。」って、パパママに見せてくれる、とびっきりの笑顔で言えるように、ゆっくり一緒に成長していこうね。

心に残ったひとこと

伊藤美智子（岩手県）
福原保育園子育て支援センター

あれは、3年前。長女が生まれて1ヶ月ほど経った頃です。当時勤めていた職場から産休をもらい、単身赴任をしていた夫の所で家族4人暮らし始めました。

しかし、当時2歳の長男は久々に家族揃って過ごせるよりも、大好きな保育園を休み、初めての土地で過ごすことが、かなり精神的なダメージになったようで、一日中窓の側で寝転び、力なく保育園のお友達の名前を呼び、一人ボーっと遊ぶ日が何日か続きました。

まるで話に聞くうつ状態のようで、親心にも、このままでは長男に良くないのでは・・・と心配になり、どうか、保育園に通っていた頃のように、元気に遊んで欲しいと、近くの子育て支援センターに行こうと思い立ちました。

初めての土地の初めての場所。開放時間ギリギリでしたが、子供のためだと思い、勇気を出して行ってみました。外は寒く、雪もチラホラ舞う園庭には、誰一人遊んでいる姿もなかったけれど、長男は、久々に目にした遊具に目を輝かせ、生き生きと遊び始めました。そんな私達を見た支援センターの先生が、声をかけてくれ、寒いからと室内に案内してくれた時、「お母さん。上手に子育てしているわねぇ。」と、予想もしなかった一言を掛けてくれました。「お兄ちゃん、大きな声でこんにちはって言ってくれたのよ。なかなか初めての人に対して言えないわよ。」と。出産直後の心も体も不安定な時期。いくら自分で選んだとはいえ、幼な子を2人抱え、慣れない土地での生活は不安で一杯でした。長男の様子を見ては自分を責め、子育てに追われ、はかどらない家事にイライラし、全てがマイナスに向かいそうな時に、そんな言葉を掛けてもらい、思わず目頭が熱くなりました。

その後、私は職場に退職願いを出し、毎日子供とベッタリ向き合う生活を選びました。自分の子育てに、迷う時もありますが、あの日の一言は、今でも私を支え続けてくれています。

未熟ママ

早乙女みゆき（栃木県）
栃木県さくら市あおぞら保育園
子育て支援センターサンサンサロン

私は十九歳のときに周囲の反対を押し切り結婚し出産しました。子供と買い物に出かけたときのことです。年配の方が私に近寄ってきて言いました。「子供は大切に育てなきゃだめよ。宝物なんだからね。」まるで私が虐待をしている様な言い方でした。若い親たちの虐待のニュースは報じられていることは多いですが、みんなが虐待しているわけではないのに、とすごく悲しくなりました。

近くの保育所でサロンを開いている事を知り、不安もありましたが勇気を持って行く事にしました。前日の夜は、また受け入れてもらえなかったらと思うと眠れなくなりました。

サロンのドアの前に立って深呼吸をして中に入ると優しく元気な声で先生が迎えてくれました。その笑顔につられて私の緊張もほどけていきました。

サロンに来るママ達は、十も下の私のことを、下に見たり、子ども扱いをせずに接してくれます。それがどんなに嬉しかったかわかりません。私は自分に自信がありませんでした。周りのママ達は三十歳前後、子供と接する態度も落ち着いているし、やっぱり自分は子供なんだと悩んでいました。その事をサロンのママに相談していると、二歳の娘がかけ寄って来て言いました。華穂のママが一番だと真剣な顔をして言いました。私は驚きと嬉しさで思わず泣いてしまいました。

サロンに行くと嬉しいこともありますが、子供と衝突したり悩みが増える事もあります。ですが、子供の笑顔と思いもよらない一言で幸せな気持ちにさせられることもあります。私はまだまだ未熟な母親ですが、先輩ママ達やサロンの先生に力を貸してもらいながら、子供と一緒に少しずつですが立派なママになれるように頑張っていきたいと思います。

ママの笑顔が戻った日

永井由香（岩手県）
社会福祉法人滝沢村社会福祉協議会
親子サロン「チャチャチャ」

「ママもまたおいでね。」

その何気ない一言が、私を救ってくれた。

長男を出産してから三度目の転勤。度重なる引越しで、環境の変化に敏感な長男の夜泣きと生後数ヶ月の次男のお世話に、私自身疲れていた。

頼れる人のいない土地。子どもにつきっきりの長く心細い一日。ろくに家事もこなせず、虚ろに考え込む。自分の存在は一体何の価値があるのだろう。孤立感が高まるにつれ、自信を失っていった。

そんなある日、思い立って近所の親子サロンへ出掛けてみた。そこでは五、六人のおばあちゃん達がサポーターとして積極的に子どもと関わり、遊んでくれていた。その優しい眼差し、大らかな包容力、あったかい手。和やかな空気にすっぽり包まれてしまった。

「ママっていうものは、ただでさえガミガミ言っちゃうものでしょう。いいのよ、ここでは黙って見てなさい。暴力とやんちゃは違うんだから。」

そう言って"やんちゃ"な息子を自由に遊ばせてくれる。喧嘩も勉強。経験豊富なおばあちゃん達がいつも見守ってくれている。

帰り際、おばあちゃんが一言。

「ママもまたおいでね。」

嬉しかった。涙が出そうになった。

母親は子どもにとって太陽であり、笑顔を絶やさない存在でありたい。母親の精神状態が健康でないと、子どもはぐずぐず荒れ始め、うまくいかないものだ。笑顔でいるためには、支援を受容する柔軟な心も必要だ。

ママを大事にしてくれる親子サロン。それから毎回参加している。子どものため。そして私のため。あの一言で、たった一つの大切な居場所となった。

心に響いた言葉

you（大阪府）
子育ち親育ちサークル
「道親仲間」ほっ♪とものす

その時、私は子育てに疲れていたのかもしれない。ただそれを自覚はしていなかった。

妊娠28週目で生まれた超未熟児の双子が、自宅に戻ったのは3ヶ月半後。初めての子育ては無我夢中の毎日だった。子供たちが10ヶ月になった頃、妊娠中母親教室で知り合った同じく双子ママの友人に紹介してもらった子育ち・親育ちサークルに顔を出し始めた。子供2人分の荷物を準備して、2人の機嫌が良い時を見計らってベビーカーに乗せて外出するのは本当に大変だった。それでも主人以外の大人と会話ができると思うだけで頑張れた。最初は「双子ちゃんなんですね。かわいい」と声をかけてくれる人たちに「ええ。そうなんです」と答えるのが精一杯。スタッフの方が2人の面倒を見てくれるが家に帰るとぐったり疲れていた。それでも外出することは自分への自信にも繋がった。

参加して数回たったその日は「みんな好きなことをおしゃべりしましょう」という回だった。みんな自己紹介に続いて今思ってることを話す。私は何気ない普通の紹介で終わらせようと思っていたのになぜか知らない間に泣いていた。進行役のスタッフの方の「頑張らなくてもいいんだよ。泣いてもいいんだよ」という言葉で涙がとめどなく溢れた。その時初めて、自分が必要以上に頑張っていたこと、無理をしていたことを知った。子育てが辛いんじゃない、子供たちもかわいい。でも不安や孤独に押しつぶされそうでどうしようもない時がある。そんな私の気持ちを感じ取り、包み込んでくれたその言葉に助けられた。

現在、子供たちは2歳6ヶ月。毎日目が回るほど忙しく、わんぱく盛りでついつい怒鳴ってしまうこともある。でもそんなとき思い浮かぶのが「頑張らなくてもいいんだよ。泣いてもいいんだよ」という言葉。いつか子供たちが成長し、壁にぶち当たった時、私が子供たちに言ってあげる言葉かもしれない。

はじめまして！

私はママではありません。高2の女子です。
いつもここに来ると赤ちゃんを抱っこさせてもらっています。
かわいいです。時々「若いママね～」と声をかけられます。
2歳頃からサークルでいろんな赤ちゃんと一緒に遊んでいるから
慣れているのかもしれません。
となりにお座りしている双子ちゃんに声をかけているのは妹です。
「こんにちは、はじめまして。私達も双子で～す！」

橘 優生（石川県）
金沢市教育プラザ富樫子育てひろば「こあら」

雨ふりの出来事

井口絵美（群馬県）
群馬県渋川市コスモスひろば

雨が降ると、思い出す出来事があります。
1歳4ヶ月の冬、息子と育児支援施設の保育園へ行った時のこと。
12月の今にも雪になりそうな冷たい雨の日、お部屋の中ではお友達とママたちが集まり、先生が絵本を読んでくださったり、お歌を教えてくださったりしていました。初めは楽しんでいた息子でしたが、途中からお外に行きたいと落ち着きがなくなってきて、私が雨だから、寒いからとなだめても、最後には、みなさんにも迷惑になるくらいだだをこねはじめてしまい・・・結局、二人で外にでて遊ぶこととなりました。
びゅうびゅう北風に吹かれながら、びしょぬれで遊ぶ息子、びしょぬれでそばにいる私。お部屋のほうに目をやれば、暖かいお部屋でみんなが楽しそうに絵本を読んでいる・・・。私は息子の自由にさせてやりたい一方で、「皆さんにどう思われるのだろうか?」、「先生は私のやり方をどう思われているのだろう?」などとだんだん不安になってきて、どんどん気持ちが沈んでいってしまい、最後には「うちの子は、大丈夫なのだろうか?」と涙がでてきていました。終わりの時間がやってきて、先生が私たち親子のところへきてくださったとき、私は「こんなとき、外で遊ばせるのは間違っていますか?」と、半べそをかきながらききました。すると先生は、「いいんじゃない。風邪ひかなければ。」とにっこり答えてくださったのです！「あ。そうか。」と、なんだか、涙がでたこともおかしくなってしまうくらい簡単なことだった気がして、気持ちがぱぁーっと晴れたのでした。そんな気持ちで、息子を見たら、「大丈夫?」どころか、たくましくさえ見えてきて、思わず笑ってしまいました。
あれから、息子ももう2歳になり、言葉で気持ちの疎通ができるようになってきました。私も新米ママなりに成長し、少々のことでは動じなくなりました。
雨が降ると、その時のことを思いだし、もっとおおらかに子育てを楽しもうと、なつかしく元気になるのでした。

雨あがり

仲良く同じ長靴を履き、手をつないで水たまりに向かう姉と弟。
雨上がりの『森』は最高に楽しい。最初の一歩を踏み入れてしまったらもう後戻りはできない。全身泥水まみれになり、服の色が変わってしまうほど豪快に遊ぶのだ。でも、こんなことができるのも『おやこの森』ならでは。洗濯は大変だが、子どもたちの豪快な遊びぶりが楽しみで、雨上がりの日は着替えをたくさん持って『森』へと急ぐ。

安井安希子（宮崎県）
延岡子育て支援センターおやこの森

解き放たれた瞬間

石原聖子（岐阜県）
美濃市地域子育て支援センター
ひよこくらぶ

私は熙人（長男）が保育園に入園するほんの数ヶ月前まで、ひよこくらぶに参加するのが苦手でした。他のお母さん達にもなじめず、一人で壁を作っていたのかもしれません。”子供のため“と思い、頑張って参加していましたが・・・。

ある冬のひよこくらぶ、栗山ママのスキンシップタイムでのこと。「『私と○○（自分の子供）のしあわせの記憶』という内容で発表し、みんなに幸せのおすそわけをしましょう」ということがありました。切迫早産で入院し、産まれる二日前までトイレ以外の移動を制限された辛く不安な日々。無事に生まれてきてくれたときの感動。当時の心境や感情が思い出され、自分が話す順番になる前から泣いてしまいました。涙で言葉がつまり、話しは進まないし・・・。恥ずかしい～っと思いましたが、泣いてしまった恥ずかしさより、何とも言えないスッキリ感があります。それからでしょうか。肩の力を入れず、少しずつみんなの輪の中に入り、”子供のため“だけであったひよこくらぶが、”自分と子供のため“に変わったのは。

今ではすっかり愛子（長女）とひよこくらぶを楽しみ、年少児になった熙人の保育園生活をこっそり（?）のぞく日々を送っています。

子供達に出会えたあの感動を思い出し、素直な気持ちになることができたこと、子供達やひよこくらぶの先生、お友達のお母さんに感謝し、来年四月に愛子が保育園に入園してからどのような恩返しが私にできるか模索中です。

りくくんはじめの一歩

奥山ルリ子（滋賀県）
甲賀市甲賀子育て支援センター

「いち・に・さん・し・ご・ろく・しち・はち・きゅう・じゅう」「りくくんすごーい！」ある晴れた昼下がりの午後、みんなの拍手が鳴りやみません。りくくんが初めて歩けたのです。りくくんが初めて歩いた場所、それは子育て支援センターです。お母さんたちは見知らぬ土地にお嫁に来て子どもが産まれ、子育て真っ最中。そんな時、子育て支援センターの存在を知り、遊びに来られました。子どもたちは、お友達と一緒に楽しく過ごし、いつも元気いっぱい、笑顔もいっぱい溢れています。

子育て支援センターには”お友達を作りたい“”ゆっくり子どもを遊ばせたい“”たまには家のことを忘れてホッとしたい“など、お母さんたちのいろんな思いが集まります。私もそんなお母さんの一人でした。私は「子育て中のお母さんのお手伝いが少しでもできたら」と子育て支援センターの職員になりました。ある日のこと、隣の町でお母さん方が中心となって活動される育児ひろばがリニューアルオープンされると聞き、見学に出かけました。そこには素敵な笑顔でスタッフとして働く、りくくんのお母さんがおられたのです。私は「久しぶり。りくくん大きくなったでしょう？」と声をかけました。りくくんのお母さんは「りくはもう四才になったんですよ。私はりくが初めて歩いたあの瞬間が忘れられません。あの頃は子育てに疲れていて、私は子育て支援センターに行っていなかったら子どもに手をあげていたかもしれません。私は先生のようにいつまでも子どもの名前を覚えていて○○ちゃん元気？と声をかけてあげられる人になりたいんです。」と話してくださいました。私はお母さんの強い思いを聞くことができてとても嬉しく思いました。自分がしてもらって嬉しかったことをまた誰かにしてあげる、そんな思いは鎖のようにどんどんつながって大きな大きな輪となっていくことでしょう。そこには素敵な笑顔と溢れる愛がいっぱいいっぱい詰まっているのですから。

笑顔のちから

古屋みずほ（北海道）
七重浜保育園子育て支援センター
ピュアランド

私には5・3・1と3人の子供がいます。3歳の長男は2歳半の時、自閉症と診断されました。多くの問題と向き合う日々です。

子育て支援センターへ行くきっかけは転勤。長男1歳半の時です。七重浜保育園にあるピュアランドへ通う事にしました。私は勇気を出して行きます。息子はかじったり、物を投げる問題児だったからです。いつもニコニコ元気なたいちゃん。でも、一言も話しません。言葉の出ない不安はありましたが、何しろ凄い運動能力だったので、「仕方がないか。」といった感じでした。他のママ達と話す暇がない位、目の離せない子供でした。

2歳の検診で笑い話になるはずが、私だけ暗闇の世界へ迷いこんだようでした。

療育センターへ行く。ピュアランドの先生方はただうなずき、笑顔で「待ってるよ。」と言ってくれました。その言葉どおり、私はピュアランドへ行きました。

障害という大きな壁を越えられない私に、先生方はいつも笑顔で接してくれました。そして、私と息子のために、1人で遊ぶスペースを作ってくれました。授乳スペースに滑り台と車を置いてくれました。息子にはすごく大事なスペースです。不安な気持ちを落ち着かせて、又出て遊ぶ勇気をくれます。障害を理解していなければ、対応は違うと思います。

そんな先生方の笑顔の力もあり、私も少しずつ笑えるようになりました。そして気付いた事。ママが笑っていないと子供も笑ってくれない。子供達と皆さんの笑顔に救われ、私の世界は色をもどしていきました。

今、暗闇で泣いている人も、その闇もふくめていつか笑える。私達にはその力がある。一人で笑っても細く、弱く、涙が勝ちそうですが、一緒に笑うと、ちょっとだけ涙に勝てるかもしれません。

自閉症の理解と、幸せな明日のために。

支援センターの思い出

森田紀子（兵庫県）
神奈川区地域子育て支援拠点
かなーちえ（神奈川県）

初めての子育て、「育児本」をいくら読んでも全然その通りにならない。

悩みは、風船みたいに膨らんでいく。母乳で育てなくっちゃ、公園デビューは？　お友達沢山作らなきゃ、色々な所に連れて行かなきゃ、あれもこれも・・・だんだん疲れていく自分がいました。

近くの神奈川地区センターへ、初めて行きました。子育て支援の方は温かく迎えてくれて、親子で、ただゆったり過ごして、悩み相談して「す～っ」と気持ちが楽に。

ママが楽な気持ちでいればいいんだ。子どもも何だか家より楽しそう。そんなシンプルなことを気づかせてくれました。

赤ちゃん時期を通りすぎたら「イヤイヤ期」が到来。今度は「かなーちえ」へ悩みを相談。公園から「帰ろう。」と言うと真冬の池に飛び込む、当時2歳の娘の激しい行動を相談しながら、涙がこぼれそうに。

「いいのよ、ずっといたら、そのうち自分から帰るわよ。お母さんも頑張ったね。」

相談の間、娘をみていてくれていたスタッフの方からは「遊び方上手ね～、みんなも遊びを真似していたよ。色々遊び方教えてくれて、ありがとう。」と、娘を誉めてくださいました。ああ私も子どもも、このままでいいんだ・・・また再度気づかせてくれました。

現在4歳、幼稚園の年少になった娘。昨年、主人の転勤で生まれ育った横浜から遠く兵庫県へ。

帰省したとき「かなーちえ」へ行きました。「おかえり。」と迎えてくれました。とっても嬉しかったです。

お友達と遊んだり、子育ての講演会を聞いたり、娘を保育に頼んだり、大泣きしたり。子育てのヒントを沢山頂いた場所。

娘が言う事を聞かなくて困る時「かなーちえ」の講演会で聞いた柴田愛子先生の「あきらめることも大事」を思い出します。帰省の時、長旅で飽きた娘には教わった手遊び、ハンカチ遊び・・・4歳になった今でも大喜びします。

沢山の事を教えてくれて、ありがとうございました。娘と私の大切な宝物のような場所です。

我が家の宇宙人

上野憲子（山口県）
つどいの広場「梅光ほっとみーる」

「おはよう。」「おはようじゃない。」、「着替えようか?」「いや。」、「ご飯食べようか?」「食べない。」これは一年前、当時二歳だった長女との毎朝の会話です。魔の二歳児といわれる反抗期に次女が産まれ、突如長女は会話の通じない宇宙人に変身してしまったのです。

長女が一歳の頃から通っているつどいの広場『梅光ほっとみーる』（通称ほっとみーる）では、毎月テーマを変えて、先生が勉強会を行っています。偶然にもその月は「反抗期のこどもたちとの関わり方」でした。長女との関係をなんとかしなければと思った私は、長女と生後二ヶ月の次女を連れて、話を聴きに行きました。

長女の言っていることは単なるわがままであり、どうしてこんなに母を困らせるのだろう、とそれば かり考えていた私。でも勉強会での先生の話には、目から鱗が落ちました。長女の「いやいや」は自己主張の芽生えであり、「見て見て」は安心感を求めていたとは…。同じ反抗期のこどもを持つママたちともお互い共感しあい、とても晴れ晴れとした気持ちで家に帰りました。勉強会の翌朝、私は驚きました。起きてきた長女が、昨日までの宇宙人とは違い、一人の人格を持ち始めた人間として見えたのです。いつものやりとりも、成長の一環だと思うと、なんだか感動すら覚えてしまいました。

最近ほっとみーるで、去年と同じ反抗期がテーマの勉強会がありました。長女は見事に宇宙人から人間に戻り?、この春から幼稚園で楽しく園生活を送っています。勉強会もそれは楽しく過去を振り返ることができました。学んだり共感したりしながら、親子は少しずつ大きくなっていくのだろうと感じました。そう気づかせてくれたほっとみーるやママ友達に、感謝しています。

来年は、次女も魔の二歳児。でも今度は、寛大な気持ちで、反抗期の次女を迎えられそうな気がします。むしろ、楽しみですらあるのです。

あったかい涙

多賀糸智香子（秋田県）
横手市子育て支援センター
わんぱく館内　マムチャサロン

朝まだ早い市の子育て支援センターのマムチャサロンでのこと。他の親子はまだ来ていず、息子と私の一組だけ。いつも優しく声をかけてくれるM先生に、「実は昨日の夜、こんなことがあったの。」と何気なく胸につかえていたものをポロッと吐き出した。

2才の一人息子を叱った後、初めて彼に、「かかちゃん、大っ嫌い!」と言われてしまったのだ。私のショックは大きく、その場でオーイオーイと大泣きしてしまった。目の前の息子が急にオロオロしてしまう程に。帰宅した夫に事の顛末を話したら、

「お前バカだなぁー。これからの人生の中でそんなことでいちいち泣いていたら涙がいくらあっても足りないぞ。」と、一笑された。そうなのだ、わかっているけど。「初めて」の「大嫌い」の衝撃はそれ程までに大きかったのだ、私にとっては。

自嘲も含めて、面白おかしく先生に話したつもりだったが、なんだか先生の様子が変だ。と、次の瞬間、先生の両目からツーッと涙が流れ落ちた。

「お母さん、大好きな子供に初めて『嫌い』って言われたら、辛かったでしょう。」

そう言ってくれた先生の顔見ていたら、私もぐしゃぐしゃ涙が出てきた。

ほんとにささやかな我が家の子育ての一ページに、こんなに心を込めて耳を傾けてくれた先生。胸がぐっと熱くなった。自分一人の子育てじゃない、理解してくれる人がいる!　昨日の事だけでなく、それまで子育てで悩んでいたことすべてが、すっと軽くなった。

このマムチャサロンで親子共、育てられ見守られて、あの日から3年が経った。それでもなお、子育てや自分自身に心細くなった時、M先生の涙を思い出す。すると元気が湧いてきて頑張ることができるのだ。一人じゃない、きっと誰かが応援してくれている、と。

ねえママ達、一人じゃないよ
―支援センターで私がすごした九ヶ月間―

河合十明子（岐阜県）
妙高幼稚園支援センター
コミュニティママプラザ

結婚を機に保育士の仕事を辞め、出産子育てを経験し、二人目の子が満一歳の誕生日を迎えた頃、産休代替として支援センター担当保育士の話を頂いた。幼稚園の中の一室にあるコミュニティママプラザ（略称コミママ）には、週二回未就園の親子が遊びにやって来る。

遊びや親子ふれあい企画もあるが、この場所の大きな意味に私は気づかされた。ここに来るママ達はいっぱいおしゃべりしていく。話を聞いていると「みんな同じなんだ。一人じゃないんだ。」という気がしてくる。私は知らない土地に嫁いで来て、友達もいない淋しさの中で子育てをしてきた。そんな私にコミママは、仲間がいるよと教えてくれた。傍から見ればたわいもない愚痴に聞こえるだろうけど、ママ達にはこの場所とこの時間が必要だった。支援センター担当でありながら、私自身も子育て真っ最中のママの顔になっていた。

ある日『命ってあったかい』という番組を、みんなで見ようと企画した。助産師さんが小学生に、赤ちゃんが誕生するまでの十ヶ月を実物大の人形を使って授業するドキュメント。ママ達は、自分のお産を思い出し、ここまでの苦労を振り返って涙した。世のママ達は妊娠、出産、育児、すごく大変な事を必死で頑張っている。その頑張りを「大変だね。お疲れさま。大丈夫？」と同じ目線に立って、心から声をかけてくれる人がいるかな。この企画で、ママ達は心の奥にしまい込んでいた、たくさんの思いを素直に言葉に出せた。それは同じ経験をしてきた仲間が、共感して耳を傾けてくれたからだと思う。ママ達は笑顔を見せ「また頑張ろう」と帰っていった。

短い期間だったけど、コミママでママ達や先輩保育士から学んだこと―子育て支援で大切なことは、子どもの育ちももちろんだけど、その子を育てるママが元気でキラキラ笑顔で子育てができるようにと願う想い。ママ達と笑った・泣いた・悩んだそして元気をもらった九ヶ月間は、私の宝物になった。

優しい心

「ちょっと待っててね～。今ごはん作ってあげるからね～」
すっかりお姉ちゃんぶって自分より小さなお友達のお世話を焼いているつもり。
またお人形をおんぶしたり、寝かしつけたりの仕草も大したものです。
三年前、生後三週間でひろばデビューし、スタッフさんや会員さん、お兄ちゃん、お姉ちゃん、皆からかわいがられて育ってきました。だから自然と身に付いた優しい心。ひろばで頂いた優しさはこの子達が広げていくのでしょう。

横山朋子（神奈川県）
おやこの広場びーのびーの

カランコロン！
―つながり―

まっきぃ（香川県）
NPO法人わははネット
わはは・ひろば坂出

「カランコロン！」わはは・ひろば坂出の入り口には出入りを知らせる小さな鐘が付いています。

「おはようございます」「こんにちは」いろんな顔で入ってきてくれる利用者さん達。この「カランコロン！」が私とみんなをつなげる大切な音です。

この音で入り口に目を向けてその親子との今日の出会いが始まります。毎日のように決まった時間に来てくれるお友達。「おはよう。今日はお買い物して来たの？」「おはよう。素敵！　新しい靴だね。」時々来てくれるお友達。「あら、ママと手をつないで歩いて来れたの？　すごいね。」「ヘアスタイル変えたんですね。とっても似合ってる。」久しぶりのお友達。「あら、大きくなったね。人見知りもするようになったんだね。大変だけど嬉しいね。」

今度はちょっとゆっくりとした「カランコロン」初めてでそうっと開けてくれた音。初めは誰でもドキドキするよね。そんなドキドキも伝わってくるような、大丈夫だよと伝えたくなるような「カランコロン！」です。

どれもこれも大切なつながり。すべてが「カランコロン！」から始まります。

どの「カランコロン！」から始まっても、わはは・ひろばでの時間が子ども達とママ達にとって素敵な時間となりますように。そして、また次へとつながっていきますように。

「子育てひろば０１２３ 育ちの詩」を読んで

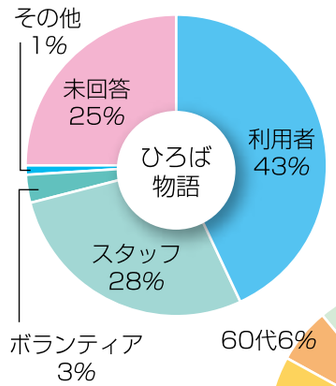
応募者の内訳

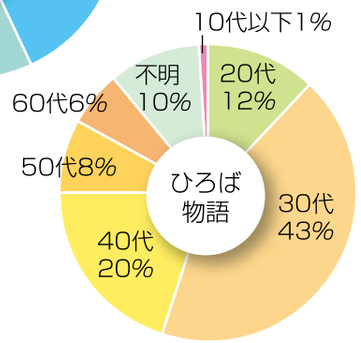
第一回子育てひろば0123育ちの詩では、2009年7月から11月までの間、「ひろば物語」、「フォトひろば物語」の募集を行いました。
「ひろば物語」には180編、「フォトひろば物語」には32作品のご応募をいただきました。

12月初旬に開かれた審査委員会にて、「ひろば物語」35作品、「フォトひろば物語」8作品が決定しました。

都道府県	利用者	スタッフ	ボランティア	その他	未回答	総計
北海道	1	2			5	8
秋田県					1	1
岩手県	4	1			3	8
宮城県	1					1
山形県	4					4
福島県	2					2
新潟県	1	4			1	6
栃木県	2				1	3
茨城県	1	1				2
群馬県	3	1	3			7
埼玉県	5	2				7
千葉県	6	4			2	12
東京都	7	1	1		4	13
神奈川県	8	2			2	12
長野県	3	1				4
山梨県					2	2
静岡県	1				5	6
愛知県	2	7				9
岐阜県	3	3	1		1	8
石川県	1	2			1	4
富山県	1					1
福井県		1			1	2
和歌山県	1	3				4
大阪府	4	4			1	9
滋賀県		2			1	3
兵庫県	4					4
岡山県					2	2
島根県					1	1
広島県		1		1		2
山口県	4					4
愛媛県	1	5		1	1	8
香川県		3			2	5
徳島県		1				1
高知県					1	1
福岡県	2				1	3
長崎県	3					3
熊本県					2	2
大分県					1	1
鹿児島県	1				2	3
沖縄県	1				1	2
総　計	77	51	5	2	45	180

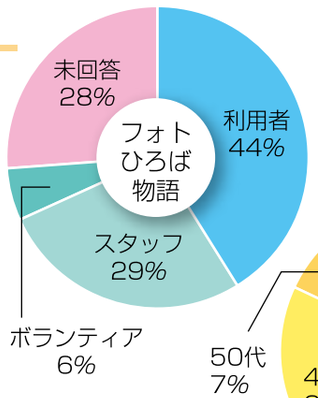
ひろば物語 応募者の内訳

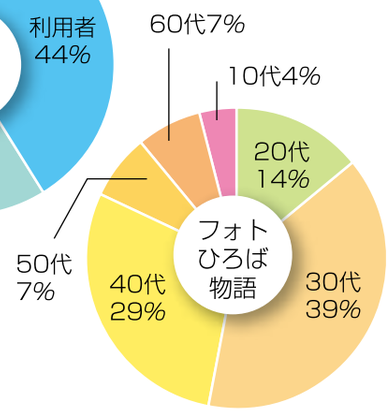




都道府県	スタッフ	ボランティア	利用者	その他	未回答	総計
北海道			1			1
岩手県	1		1			2
宮城県			1			1
栃木県			1			1
群馬県			1			1
埼玉県			1			1
千葉県					1	1
東京都			2			2
神奈川県	1	1	1			3
愛知県			1			1
岐阜県					1	1
石川県	1	1				2
和歌山県	1				1	2
大阪府			1			1
滋賀県					1	1
広島県					1	1
山口県	1					1
香川県					2	2
徳島県					1	1
福岡県			1		1	2
長崎県	1					1
宮崎県	1		1			2
不　明			1			1
総　計	7	2	14	0	9	32

フォトひろば物語 応募者の内訳





審査員プロフィール・総評

審査委員長　新澤　誠治

下町にある「神愛保育園」に1958年園長として就任。園長40年の歩みの中で障害児保育、延長、産休明け保育、地域活動、子育て支援センター活動など先駆的に取り組む。
1999年4月より「江東区子ども家庭支援センターみずべ」所長として3年間、子育て支援の実践と理論化につとめる。
2000年4月より東京家政大学の教授に就任し、2006年3月定年退職。
現在は子育て支援推進センターみずべの会代表、神愛保育園・みずべグループのスーパーバイザー、全国子育て支援センター　実践研究会の委員長、NPO法人あい・ぽーとステーションの代表理事として「子育て・家族支援者」の養成講座に携わる。
主な著作として『私の園は子育てセンター』小学館、『子育て支援　はじめの一歩』小学館等。

新しい試みとしての子育てひろば0123育ちの詩―聞かせて子育てひろば・支援センターで出会ったちょっといい話―に応えて、参加する利用者、スタッフ、サポーター等から、213の作品が集まりました。

私はこれらの作品に目を通させてもらい、子育ての当事者の生の声がひしひしと伝わってきました。子育てをする人の「初めての子育て、不安におびえる私」「数え切れないほどの心配」「引っ越してきたばかりの私」と言うように悩みを吐露する作品に、まず現代における育児の大変さ、不安や困難性がひしひしと伝わってきました。

同時に「救いを求めてひろばのドアをたたく」「支えてくれる人がいて、温かい笑顔とやさしい言葉に迎えられてありがとう」「仲間を得てみんな同じ悩みをもっているんだ、みんなで話し合い、支え合っていけばいい」と感じたなど、ひろばへの感謝、期待がいっぱい書かれていました。

また、スタッフのひろば事業にかける想い、共感的な態度で迎える姿勢、パートナーとして寄り添い、共に子育てをする子育てひろばの姿も伝わってきました。

読ませていただいて、改めて地域の孤立化の中で一人密室で子育てに取り組むお母さんの状態、夫の異動でやむなく住みなれた地を離れ、新しい地に引っ越して、そこで孤島に来たような体験が多くあったこと、現代の社会における子育ての事情を強く感じました。

また、地域社会に散らされて存在する、地域の子育て支援拠点事業がどんなに求められていることか、数が増え、ひろばの機能がますます発揮できるような運営ができるようにと強く思わされました。

また、「育ちの詩」が一回で終わることなく、毎年行われ、利用者とスタッフ、サポーターが一体となって、共に育て合っていくひろばの実践記録が積み重ねられることを強く願います。

審査員　おち　とよこ

ジャーナリスト、作家、高齢問題研究家。介護、医療、教育、育児、暮らし、それにまつわる家族、女性問題を中心に、新聞、雑誌等へ執筆のかたわら、講演、テレビ等に出演。国、自治体委員を歴任。「一人でもだいじょうぶ」日本評論社、「入院・介護ＳＯＳ」「介護保険上手に使うカンどころ」創元社他、著書多数。「生活図鑑」「料理図鑑」「母さんの小さかったとき」福音館書店など児童書も多数。

「そうそう、そうだった私も」、「うんうん、分るその気持ち」、作品の磁力に引き寄せられるようにウン十年前の育児時代にタイムスリップして、目頭がジワーとなってしまった私。「気にしない仮面」つけてたな私も、「お母さん大っ嫌い」ショックだった、孤独で対決モード、そうそう、友だちつくらなくちゃの重荷…。そんなママや、今やパパやババたちを、「おかえり」、「いつでもどうぞ」と迎えるひろばスタッフの、目線が同じ涙と笑い。センターの頼もしい一コマ。ああ、どれもみんなみんな載せたかった。作品集はそんな思いのこもった氷山の一角。

子育て広場やセンターは、ママからママへ「育ちのバトン」をつなぐ「ほっとオアシス」支え合いの輪。母屋では密室育児になりやすい現代だからこそ、大切な大切な育児の「離れ」。

そして写真からも文字からも聞こえて来た声がある。それは「一人じゃないんだ」。勇気を出して扉を開ければ「もう一人じゃない」！。

審査員　きたやま　ようこ

1949年東京生まれ。文化学院卒業。「ゆうたくんちのいばりいぬ第１集」講談社出版文化賞絵本賞、「りっぱな犬になる方法」産経児童出版文化賞推薦、「じんぺいの絵日記」と共に路傍の石幼少年文学賞、「いぬうえくんがわすれたこと」産経児童出版文化賞産経新聞社賞を受賞。主な作品に「ぼくのポチブルてき生活」偕成社、「うわさのがっこう」講談社、等のシリーズの他、「犬の言葉辞典」理論社、「番犬屋マル」メディアファクトリー、他多数。

どの作品も胸に迫る言葉が溢れ、甲乙つけがたく心にしみ入りました。

知り合いの居ない土地での子育てや、助けてくれる人の居ない孤独な子育て、子育て中のほとんどのお母さんが自分の悩みは自分だけと思い、苦しんでいます。

勇気をふりしぼって支援センターの扉を開けたお母さん、本当に良かったですね。何よりも必要なのは、肯定してくれる言葉と安心できる場所、そして同じ立場の友達なんですね。ここで救われたお母さんが、次に助ける側になって恩返しをしているという事に感動しました。どんなにセンターの存在がありがたかったかが分かります。

様々な世代の男性や女性が参加できる場所、何の利害も無いからこそ成り立つ優しい関係が、そこにはあるんですね。

皆さんの作品に触れ、支援センターの存在と必要性を、広く皆に知ってもらいたいものだと深く感じました。

審査員　柴田　愛子

1948年、東京生まれ。保育歴37年。東京都の私立幼稚園で10年間幼稚園教諭を経験した後、1982年、「子どもの心により添う」を基本姿勢とした「りんごの木」を発足。以来27年間、子どもと遊び、子どもたちが生み出すさまざまなドラマをおとなに伝えながら、子どもとおとなの気持ちのいい関係づくりをめざしている。実際に子どもにあったドラマを絵本にしている。保育、講演、執筆、と様々な子どもの分野で活動中。

初めての子育てはなかなか思い通りに行きません。みなさんが誠意を持って親になろうと努力している姿が作品を通して痛いようにわかりました。ひろばやセンターの扉を勇気を出して開き、肩の荷を降ろすことができてホッとなさった方々の声をたくさん聞かせていただきました。そんな親子の姿を無条件に受け止めるスタッフの方々の暖かさにも胸を打たれました。現代に於いて地域に子育てひろばや支援センターの存在する意味を、つくづく感じさせられる作品ばかりでした。どの作品も気持ちが込められていて、選考するのが大変むずかしかったです。

「子どもは社会の宝」といわれた時代を取り戻し、心が通いあう暮らしやすい地域作りが、みなさんの声やこの本を通して広がっていってくれることを願ってやみません。

審査員　新沢　としひこ

1963年東京生まれ。シンガーソングライター。子どもたちが歌う歌をたくさんてがける。作詞した「世界中のこどもたちが」（作曲・中川ひろたか）は、小学校の音楽の教科書に採用になっている。他に「さよならぼくたちのほいくえん」（作曲・島筒英夫）、「ともだちになるために」「はじめの一歩」（作曲・中川ひろたか）など卒園ソングの定番になっているものも多い。かつてりんごの木こどもクラブで柴田愛子と一緒に保育していたことも。

子育て支援センターというのは、誰でも利用することが出来る。そして行かなくたっていい。登録制でも会費制でもないので、何の拘束力も参加義務もない。幼稚園でも保育園も託児所でも児童館でも学校でもサークルでもない。それはつまりとても不思議なところなのだ。中途半端な存在で、実体がよく分からなかったりする。でもそういうところが、実に新しい。そしてたくさんの可能性を秘めている。たくさんの出会いと感動のドラマを秘めている。たくさんの応募作品の中に、そのことが現れていた。不器用な文章の行間から、たくさんの思いがあふれてくる。初めてセンターの扉を開けるときのドキドキした気持ち。たくさんの笑顔に出会って、だんだん不安がほどけて、新しい自分の居場所を見つけていく幸せと感謝。いろいろな作品に共通して出てきたその描写に、利用する人たちの心情が痛いほど表現されていた。ああ、これは支援センターをまだ知らないたくさんの人たちに読んでもらわねば、と思うのだった。

審査員　中橋　恵美子

NPO法人子育てひろば全国連絡協議会理事
NPO法人わははネット理事長
全国子育てタクシー協会事務局長
香川県内で子育てひろばを３拠点運営のほか、子育て情報誌や携帯電話での情報発信事業などを行っている。自身も３人の子育て中。

親になるための専門の勉強や心構えを学んで出産した人など誰もいない。戸惑い不安な中で孤立した子育てをしていることが、どんなに多いことか。

どの作品も、子育て支援拠点を心のよりどころとして、スタッフにも場所にも仲間にも安心と信頼を寄せ、それが子育ての力になっていることが良く伝わってきた。私自身も子育てひろばを運営しているので、どの作品もそのシーンが目に浮かんで来てほほ笑んだり涙ぐんだりしながら、選考に非常に苦慮した。

家庭という狭い空間の中で子育てをしている人たちにとって家族以外に自分たち親子を受け入れてくれる場所の大切さ、必要性が良く分かる。また子どもだけでなく親の成長にとっても欠かせない場所であり、親としての学びの場でもあるのだと思った。より身近により多く、こういう場所の必要性を痛感した。

座談会

地域の子育てを支える皆さんへのメッセージを込めて

審査後、作品を通してみえてきた地域子育て支援拠点の役割について審査員に語っていただきました。

＜審査委員長＞

新澤誠治（子育て支援推進センターみずべの会代表）

＜審査委員＞

おちとよこ（ジャーナリスト、作家、高齢問題研究家）

きたやまようこ（絵本作家）

柴田愛子（りんごの木子どもクラブ代表、絵本作家）

新沢としひこ（シンガーソングライター）

中橋恵美子（ＮＰＯ法人子育てひろば全国連絡協議会理事）

＜司会＞

奥山千鶴子（ＮＰＯ法人子育てひろば全国連絡協議会理事長）

撮影：角田武／構成：武居智子

何気ない励ましが心の扉を開く

新沢としひこ　作品を読んでまず驚いたのは、子育てひろばへの"道のり"があること。もっと皆さん気軽に来ていると思っていました。多くの作品が「扉を開けたら笑顔で受け入れてくれた」と振り返っていますよね。特に若い母親たちが「助けて」という切迫感を抱いて探して来ている。

柴田　全体にタイトルをつけるなら「心の扉が開いた日」。多くの母親が「大丈夫よ」といった励ましを求め、その励ましを異世代の人から得て心を開いているのが印象的でした。それは、いかに日常から地域性が失われているかの現れだと思います。

新沢としひこ　皆、"普通の人"の言葉に、神様に出会ったかのような感動を覚えている。でも、その相手がカリスマっぽいかというとそうでもない。

きたやま　神様、つまり"自分を全面的に受け入れてくれる人"を求めているのよね。でも、それは"ご近所のおばさん"でいい。

柴田　そう、日常から消えた"ご近所さん"。子育てひろばが、地域性を取り戻す場になっていることがよくわかりました。

新澤誠治　私も、笑顔やさりげない一言がこんなにも力になるのかと驚くと同時に、コミュニケーション能力が衰弱し、多くの人が自己防衛して生きている現代の地域社会における子育て支援のあり方を、改めて考えさせられました。母親たちは今、人の和や地域社会へ溶け込むことに、とても緊張していますよね。転勤も外国へ引っ越すかのような一大事になっている。保育の仕事を通じてこれまで親の悩みはわかっているつもりでしたが、作品の生の声から、現代の親たちが抱える不安の重さを知りました。

新澤誠治

おち　私は、読みながら目頭がジワーっとなってしまいました。母親たちの不安や悩みは、私が子育てをした三十年前と変わらない。しかし、孤独感は昔以上だと感じました。今の母親は、キレイな服装でバギーを押し、自由で悩みなんてないように見える。でも実は、溢れる情報や周囲に振り回され、かわいい子どもに育てなきゃ、キレイな母親でいなきゃと、自分を追い込みたくさんのストレスを抱えている。作品で〝仮面〟という表現が出てきましたが、不安な本心を隠し、そのストレスから子どもについ当たり、また自分を責めてしまう。やさしい心で子どもに向き合うためにも、まず「いいんだよ」と孤独感を受けとめてくれる〝子育てのスタート地点〟の必要性が、切々と伝わって来ました。

おちとよこ

みんなが素直になれる場に

奥山　多くの作品に〝扉を開けた瞬間〟が出てきましたが、運営者の立場としては、改めて親子を受け入れるときのスタッフやボランティアや利用者が醸し出す雰囲気が、いかに大事かを痛感しました。

中橋　実際、励ましを求めている人、悩みを吐き出したい人、仲間がほしい人など、ニーズはさまざまですが、皆、〝人〟を求めていますよね。だから皆、最初はそこにいる人たちに受け入れてもらえるか、大きな不安を抱えている。保育所併設のセンター型では〝先生〟、当事者が立ち上げたひろば型では〝スタッフ〟という立場で、多少アプローチの仕方は違うかもしれませんが、いずれもまず、利用者一人ひとりの想いをくみ取ることが、大切だと思いました。

柴田　〝ひろばブルー〟という言葉が、公園デビューのころの〝公園ブルー〟のように聞かれてこないのは、スタッフなどの〝主（あるじ）〟たる存在〟がそこにいるからだと思います。

新沢としひこ　そのスタッフが、肩肘張っていないからいいですよね。「こうすべき」とか「がんばりなさい」といった押しつけがなく、嫌なら聞き流してもいい。仲間を求めていても、与えてくれるわけではなく、所属を強いられることもない。

きたやま　保育園などと違って子どもを介しての利害関係がないから、対等に話せる関係が築けるのでしょう。

奥山　ただ、利用者同士のグループができてくると、所属感が強まり、新しい人が入りづらくなる場合もあります。

新澤誠治　誰もが一人の人間として素顔で接する場であることが大事ですよね。園長時代に「喫茶ひろば」という保護者の集いを開いたときのことですが、園長や保母といった仮面をつけている限り、親たちは本音を出さない。しかし、こちらから家庭のグチなどいって心を開くことで、相手も打ち解けてくれました。そして、大人たちが仲良く話し出すと、子どもたちもはしゃぎだす。親たちが和やかでいることが、どれだけ子どもたちは嬉しいか、思い知らされました。

日々の交わりから感動が生まれる

柴田　雨の日、子どもが外で遊んでいたら「いいんじゃない、カゼひかなければ」といわれたという作品がありましたが、逆に「濡れて大丈夫？」という人がいてもいい。大切なのは、いろんな価値観を持った人が、自然体で集い、声を掛け合うことだと思います。

柴田愛子

新沢としひこ　他人同士の「いいんじゃない」という軽い言葉が、心に響いたり、気持ちを変えたり。そんな感動が自然に生まれる自由な関係を築いているところが、子育てひろばのいいところ。

柴田　以前、若い母親たちの前で「お茶碗を投げたっていいから、ストレス発散しましょう」と話したら、「実は私そうしています。でも周りが皆、楽しそうに子育てしているから誰にも言えなかった」といってきた母親がいました。今は、同年代の仲良しでも、本音を言えない表面的な関係が多いようです。

奥山　〝仮面〟に象徴されるように〝いい母親〟を演じることに慣れ、悩みやストレスを自覚していない母親も増えているように感じます。

新沢としひこ　本当は不安や悩みでいっぱいの親たちが、ちょっとガス抜きできることで楽になり、〝自分だけじゃない〟と気づくことが大事ですよね。

新沢としひこ

奥山　普段、子どもと二人きりの母親には、人と話し、喜怒哀楽の感情を出せるだけでいいんです。そこから心も開いていく。

中橋　明るく皆と過ごしていた人が、利用者の減った帰りの会話で、本音を語りはじめる場合が多いです。だから、月1回の催しではなく、いつでも来られる場であることが大事だと思います。何度か通ううちに、心を開ける相手も見つかるし、日々の何気ない会話を重ねることで、作品のようなストーリーも生まれてくるのだと思います。

多様な力で支え育む

おち　最近は、まだまだ元気な祖父母の育児参加が増えていますが、孫と二人きりで不安を抱えている祖母や、あやし方がわからずついモノばかり与えてしまう祖父も増えていますよね。そんな新たな子育てにも応え、女性の社会参加や子育てをステップに自分の階段を上っていく女性たちのバックアップをする場にもなってほしいと思います。

柴田　子育て相談にも最近、祖母からの悩みがとても増えています。特に昔と育て方が違うことに戸惑っている人が多い。また、口出しされるから、負けたくないからと、実の親に相談しない親も増えているようです。

おち　逆に他人だと、親世代の助言も聞けたり相談できたりするのかもしれませんね。

新沢としひこ　そういった意味でも、さまざまな参加や利用の仕方があり、いろんな人と交わる機会があることが、大切ですよね。

中橋　ただ、何かきっかけがないと来にくいようですが、催しだらけになってしまうと、自由にくつろげる場ではなくなってしまう。日常につながるきっかけをいかにつくるかが、難しいところです。

中橋惠美子

新澤誠治　一か所のひろばに定着せず親子向けのイベントを渡り歩いている親子も多いですが、それだけでは地域社会との関係は育めない。子育て支援では、日常性をもって自然な人間関係を育むことが第一です。母親、父親、祖父母、学生や住民やボランティアなど、さまざまな地域の力を取り込み、一緒に子育てしていく環境をつくっていくことが大切です。ひろばは地域の人が織りなすところだと思います。

日常に"いい加減"の空間を

きたやま　緊張している親子が早く場になじめるよう、日常的な空間で迎えてあげることも大切ですよね。入園前の親子が集える場を保育園に作っていた友人も、普段の気持ちのまま通える家庭の延長のような空間が大事だと話していました。

新沢としひこ　いろんな人が集う場だけに空間づくりは難しいですよね。守られていながら開かれていないといけない。イベントばかりのワンダーランドではなく、風通しと居心地のいい、さりげない空間であってほしいと思いますが、何よりコミュニケーションが乏しく孤立している親子のために"軽いドア"であってほしいと思います。

柴田　子育てに力んでいる親が増えている時代だからこそ"いい加減"であることが大事よね。でも、その加減がとても難しい。特に今の親は、「いい子に育てたい」と思うあまり"正しさ"を求め、遊具でさえ"正しいルール"を学ぶ道具"にしてしまう。子ども同士のコミュニケーション能力や自己肯定感が低下している今、幼児期から対人関係を学ぶことは大切ですが、「○○ちゃん貸してでしょ」「はいどうぞでしょ」と子どもの感情が働く前に、記号のように言葉を植えつけている親が増えています。

きたやま　もっと年齢があがって遊びから学べばいいことを、最も自由であるべき幼児期に、親は教育しようとしてしまうのよね。

きたやまようこ

柴田　その、親の"正しい"を尊重してしまうと、貼り紙とルールばかりになって、のびのび育つ場ではなくなってしまう。

奥山　理想を主張するのではなく、まず、広い視野を持って価値観の違う他者を受け入れることが、皆で子育てする場を考える上でも、大切なのかもしれませんね。

人の和で人は育つ

柴田　地域社会に無関心だった人たちも、親になった途端に一人では生きていけないことを知り、人の和を求めている。でも、それ以上に子どもたちは、人の和や温もりを必要としています。一人ひとりの子どもの育ちを地域の皆で大らかに見守るような環境にしていきたいですね。

奥山　作品に「心の成長を大事に」といわれた話がありましたが、親子に今、「焦らなくてもいいよ」といってあげられる場のひとつが、子育てひろばだと思っています。作品に「人と関わることでしか解決できないことがある」という言葉がありましたが、子育てによって得られる喜びや学びもたくさんあります。人間関係が希薄な時代だからこそ、その喜びを分かち合える場を、地域社会に増やしていけたらと思います。

奥山千鶴子

新澤誠治　「来てくれてありがとう。こちらこそ～」という言葉ではじまる作品がありましたが、「ありがとう」と言い合える人間関係を築いていることに、感心しました。あらゆる行為に対価を求め、してやる・してもらう関係が当たり前の現代だからこそ、とても大事なことだと思います。子育てひろばは、地域社会が崩壊している今、人間が生きて交わり、人の和を回復しようとしている場です。共に相手を気遣い育ち合う場を、これからもどんどん地域の中につくっていってほしいと思います。

新沢としひこ　この作品集が、子育て世代以外の人にも「こんな場があるのか」と知るきっかけになるといいよね。

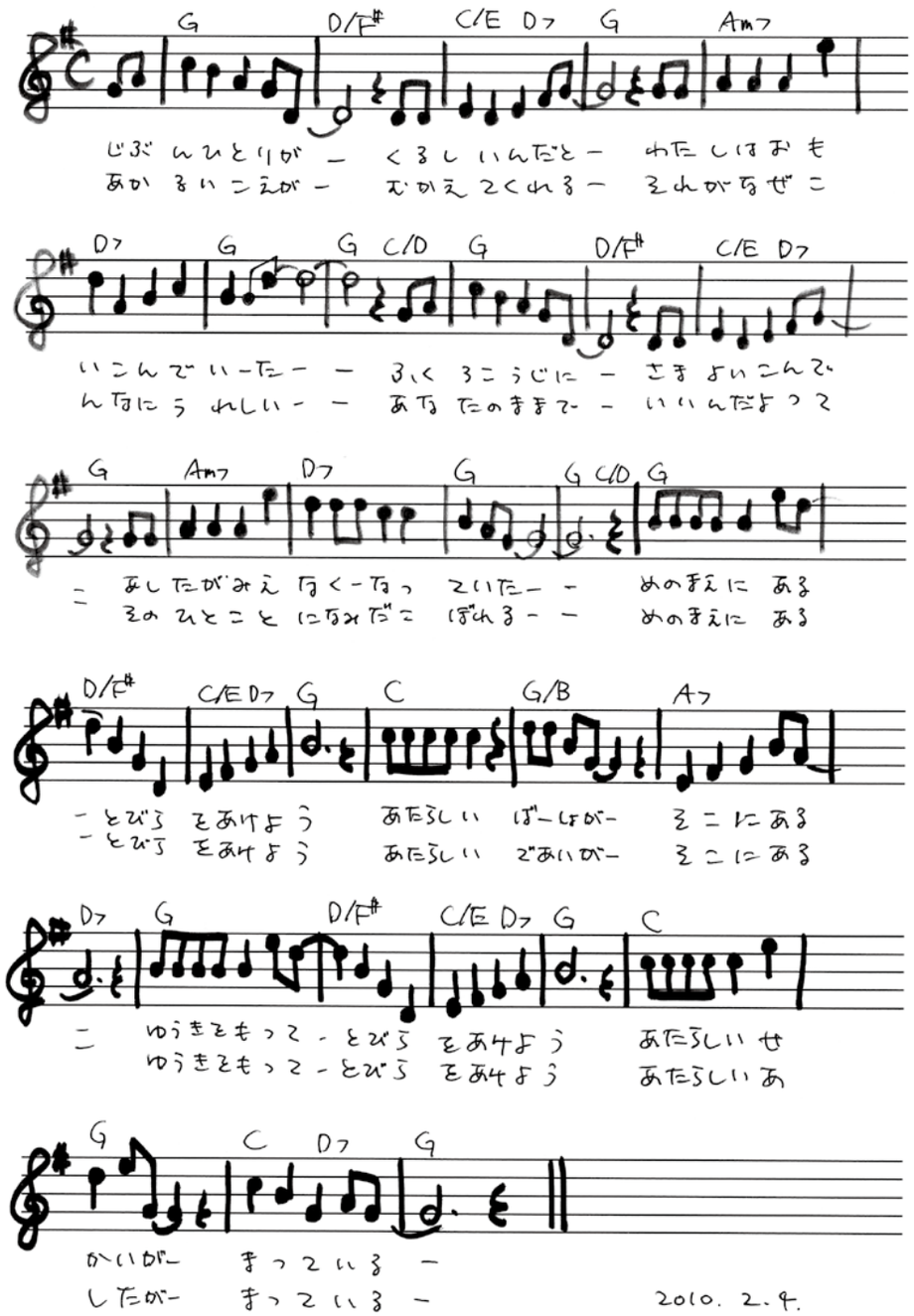
きたやま　子育て世代には、仲間がたくさんいることを知ってほしいですね。

おち　"一人じゃない"というメッセージが伝わるといいですね。

中橋　まだまだ必要としている人が知らない場合も多いので、この一冊が「行ってみよう」というきっかけになってくれることを願っています。

とびらをあけよう

詞・曲 新沢としひこ



2010. 2. 4.

編集後記

「子育てひろば・支援センターで出会ったちょっといい話」、皆さんの心にも届いたでしょうか？

この作品集には、応募してくださったすべての方々、広報・審査・編集に関わってくださった方々の想いがたくさん詰まっています。多くの方々に支えられて無事、発行できたことを心から感謝したいと思います。

応募作品の中には、「日頃は手がかかる下の子ばかりに目が行きがちだけど、上の子のことを考える良い機会になった」、「子どもの育ちを振り返る時間を持てた」、「ひろばでの業務を見つめ直す機会になり、やりがいの再確認になった」など嬉しいお手紙が添えられているものもありました。事務局スタッフは、原稿を読むたびに泣いたり笑ったり・・・子育てや仕事に忙しい中、時間を作って書いてくださった皆さまの作品を通してたくさんのパワーをいただきました。

また、ひろばやセンターに連絡をした時には、「ひろばでの出来事が本になるということを、チラシを見たときからとても楽しみにしていたんですよ！」などと温かいメッセージをいただく事もあり、たくさんの方々が心待ちにされているということを嬉しく思いました。作品集を通して、皆さまと同じ思いで活動している仲間が、全国にいることもお伝えできたのではないかと思います。

今日も、子育てひろばではドキドキ、ワクワク、泣いたり、笑ったり、様々な物語がたくさん生まれています。その物語に関わる方、共感してくださる方が、これからも増えていきますように・・・。

これからも、「人と人とのつながりの中で、育ち合っていくひろばの風景」をお伝えすることで、「子育てひろばの必要性」を広く世の中に発信していきたいと思います。

NPO法人子育てひろば全国連絡協議会
子育てひろば0123育ちの詩　事務局

審査委員特別賞について

審査委員特別賞の選定にあたり、審査委員会で検討した結果、個人の気持ちや生活を書いてくださっている作品に甲乙つけがたく、特別賞については見送らせていただくことになりました。

そこで今回は、すべての皆さまの作品の想いをもとに作詞作曲を行うこととなりましたので、この場を借りてご報告させていただきます。

子育てひろば0123育ちの詩

～聞かせて！子育てひろば・支援センターで出会ったちょっといい話。～

平成22年2月発行

独立行政法人福祉医療機構「長寿・子育て・障害者基金」助成事業

発行・編集：NPO法人子育てひろば全国連絡協議会
〒222 - 0037　横浜市港北区大倉山3－19－18
TEL：045－531－2888／FAX：045－512－4971
http://kosodatehiroba.com

表紙・本文イラスト：相野谷 由起　本文イラスト：酒井チエ子
デザイン・編集：企業組合 エコ・アド

※本誌の無断コピー、転載を禁じます。

発行　NPO法人　子育てひろば全国連絡協議会